養成段階における教員の資質・能力向上に関わる実践的取組事例分析

―福岡大学の「教職実践演習」における取組のリフレクションを通して―

人文学部 教育・臨床心理学科 教授 髙妻紳二郎
人文学部 教育・臨床心理学科 准教授 植上 一希
人文学部 教育・臨床心理学科 教授 勝山 吉章
医学部 看護学科 准教授 小柳 康子
人文学部 教育・臨床心理学科 教授 皿田 洋子
人文学部 教育・臨床心理学科 准教授 添田 祥史
人文学部 教育・臨床心理学科 教授 徳永 豊
人文学部 教育・臨床心理学科 教授 野口 徹
人文学部 教育・臨床心理学科 教授 松永 邦裕
人文学部 教育・臨床心理学科 教授 吉岡久美子
人文学部 教育・臨床心理学科 講師 伊藤亜希子
人文学部 教育・臨床心理学科 教授 大久保正廣
人文学部 教育・臨床心理学科 教授 菊池 裕次
人文学部 教育・臨床心理学科 准教授 佐藤 仁
人文学部 教育・臨床心理学科 准教授 篠崎 省三
人文学部 教育・臨床心理学科 教授 田村 隆一
人文学部 教育・臨床心理学科 准教授 長江 信和
人文学部 教育・臨床心理学科 教授 林 幹男
人文学部 教育・臨床心理学科 准教授 本山 智敬

1．本稿の目的および背景

教職課程における「学びの軌跡の集大成」としての位置づけをもってスタートした教職実践演習は、2015年度で３年目（短期大学の場合は５年目）を迎えた。その導入に際しては、様々な議論が展開されたことは周知の通りである。例えば宇佐見（2010）は、特に私立大学における教職課程の運営という観点から、開講時期の問題、受講学生数の変動に伴う問題、現職教員の確保が難しい問題、履修カルテの導入を義務付ける問題等を挙げていた。一方で、佐久間（2013）は、大学の自律性が縮小されるという根源的な課題を提示しながら、教職課程での学習経験を振り返る機会となる点や教職課程全体のカリキュラムをみなす機会となる点といった可能性を論じていた。

こうした議論があった中で、教職課程を有する各大学は、教職実践演習の開設初年度から数々の実践を積み重ねてきた。その一端を示そう。論文検索サイトであるCiniiにおいて、教職実践演習をキーワードに2006年から2015年までの論文数を確認すると、268件にのぼる、(2016年３月29日現在)。それを出版年ごとに分けると、図１のようになる。

図１を見ての通り、2010年から数が大幅に増えている。2010年度入学生から教職実践演習の必修化を含む新課程となり、履修カルテの作成も義務化されていることから、そのあり方に向けた具体的な検討が各大学等で始められたことを意味している。そして、2013年になるとさらに論文数が増えている。その多くは、実際に４年制大学で始められた教職実践演習の実践報告の論考である。このように、教職実践演習をめぐっては、その導入前の議論もさることながら、授業を展開する実践のあり方を模索する動きを看取できる。文部科学省は、教職実践演習の具体的な進め方や取り扱う内容・事例を示しているが、それぞれの大学に応じた授業の展開についてはイメージしづらい。この点からすると、教職実践演習に関する実践報告が積み重ねられてきていることは、各大学が自律的に様々な取り組みを展開し、自大学の教職実践演習そして教職課程のあり方を再検討していると理解できよう。

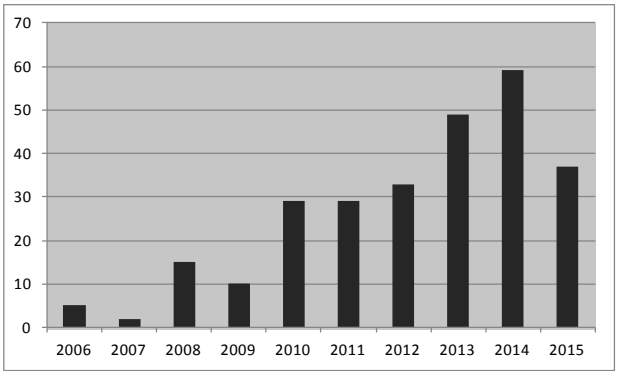


図１　教職実践演習をキーワードとする論文数
（注）筆者作成

そこで本稿では、福岡大学における教職実践演習の取

組のリフレクションを通して、今後の福岡大学における教職実践演習のあり方、そして教職課程のあり方を検討する。

具体的な実践の取組を紹介する前に、福岡大学の教職課程ならびに教職実践演習をめぐる状況を素描しておきたい。福岡大学は、９学部31学科、大学院10研究科34専攻を擁する私立総合大学であり、学生数は大学院生を含めて２万人を超える大規模大学である。教職課程を履修する学生は約2,400人にのぼり、４年次後期に設定している教職実践演習の受講学生数は342人（2015年度）となっている。そして、この342人に対して24クラスの教職実践演習を開講している。１クラスの規模の上限を20人以下に設定しており、実際には５人～19人となっている。教職実践演習を担当する教員は、「教職（養護）に関する科目」を担当している教員であり、総勢19人が最低１クラスを担当する仕組みとなっている。

このように福岡大学では、19パターンの教職実践演習の取組が存在している。もちろん、全教員に対しては教職実践演習の趣旨等の理解を図っており、履修カルテを利用した学びの省察を盛り込むことや、学校現場の具体的な課題に取り組むような活動を盛り込むこと等を伝えている。ただし、福岡大学の場合、内容の共通性を強調するのではなく、むしろ各教員が有する専門的知見を活かす体制を維持している。それは、「真理と自由を追求し、自発的で創造性豊かな人間を育成し、社会の発展に寄与する教員を養成する」という福岡大学の教員養成の理念に則り、多様な学生・教員が集まる総合大学ならではの教職実践演習を展開することを意図している。果たして、それが現実化しているかどうかは、最後に検討を加えてみたい。

以下、各教員が担当した教職実践演習の取組について、15回の授業計画、特色のある取組、特に良かったと思われる取組、見えてくる課題といった観点からまとめていく。各事例については、それぞれ担当教員が執筆している。これら19の取組を踏まえた上で、最後に今後の福岡大学の教職実践演習および教職課程の改善に向けた論点を提示したい。

２．教職実践演習の具体的取組

○事例A：自分の将来の夢・目標を見つける模擬授業

教職実践演習の授業構成は、①オリエンテーション及び自己紹介、②模擬授業のテーマについての協議、③履修カルテを踏まえての協議、④～⑦模擬授業導入演習、⑧教育実習を振り返っての協議、⑨～⑭模擬授業と協議、⑮全体の振り返りであった。特別活動や道徳の授業として、その指導力を高めることを目的とし、生徒指導等に関する課題を考える演習とした。

●模擬授業のテーマと目標

関心のあるテーマに基づき３名１グループで決定した模擬授業のテーマと概要を表A-1に示した。15分の導入の授業、また約50分の模擬授業の後に、コメント・カードを各自で記入し、それを手がかりにグループ協議、全体協議を実施した。

表A-1　模擬授業のテーマと概要

1.「なぜ、集団で行動してしまうのか」:
　行動を選択する必要性の理解
2.「SNS の使い方」:
　トラブルに巻き込まれないための知識と対策
3.「夢の木」:
　自分の好きなもの、特性を踏まえて、将来の目標設定
4.「自分をみつめる」:
　なりたい自分を探し、学校における行動の検討
5.「いじめと向き合う」:
　見つけた、いじめられたら、どうするのかの検討
6.「共生社会を考えよう」:
　障害者への配慮と支援していく行動

●「夢の木」の模擬授業

⑮全体の振り返りで、よかった授業についての投票でトップだった授業である。担当者１が授業の概略を説明し、質疑を行った。目標としては、１．好きなこと、興味があることなどを書き出し、自己分析を行うことができる、２.周りの人の大切さを理解することができる、３.

図A-1　夢の木の例

自分の将来の夢・目標を見つけることができる、であった。題材観、指導観、生徒観を紹介し、ワークシートを活用することを伝えた。

担当者２が表A-2に示すように導入、展開、まとめの授業を展開した。その際に自ら作成した「夢の木」を示し（図A-1)、作成の手続きを説明した。数名の夢の木を紹介してもらい、授業をまとめた。

担当者３が、模擬授業後の協議を進めた。「教員の夢の紹介もあり、作業の説明が分かりやすく、楽しく取り組めた」「中２にとっては進路を決めるためにも重要」「発言を求める生徒がやや限定されていた」等の意見が出た。

表A-2　授業案（簡略版）

段落	学習活動・内容・めあて	活動への支援・ねらい	形態	配時
導入	1、あいさつ 2、『夢の木』について説明 3、めあての提示 →『夢の木』をつくろう！	○夢や目標には、周りのいろいろな影響が関わっていることに気付かせる。	一斉	5
展開	1、ワークシート配布 2、『夢の木』作成 ⑴『土』…過去の経験 ⑵『根』…好きなこと、興味があること、感動したこと ⑶　幹　…長所、得意なこと ⑷水やり…周りの支え ⑸実・葉…夢、目標	○段階を踏みながら夢の木を完成させていく。その過程で過去を振り返り、また今の自分にはたくさんの人の支えがあることを理解する。そしてこれからの自分の夢や目標を立てることができる。	個	40
まとめ	1、まとめ 教師の体験談を話す 2、あいさつ	○夢や目標をもつことの大切さを伝える。	一斉	5

●授業全体へのコメント

「グループで異なる視点からの意見やアイデアを出し合い、授業をつくりあげることが良かった」や「たくさんの授業を経験でき、話し合いが多く、考えることが良かった」、「先生側だけでなく生徒側も体験できて、いろいろ考えた」、「グループワークやワークシートを活用することで、分かりやすい実践になることを体験できた」などがあった。また、今後に教員として活用できることとして「コミュニケーションの取り方や板書の仕方、指導案の書き方」「メモの使用がとても良くて、活用していきたい」などが挙げられた。

模擬授業、学生同士の意見交換で、自らの視点を広げる機会、教員として同僚と協力していく力になる体験となったと考えられる。

○事例B：

●平成27年度の全15回の授業構成

このクラスは小学校教員採用決定者２名、私立高校採用決定者２名を含んだ合計18名の演習となった。全受講生が教育実習を経験していたことから、第１回はホームルームにおける自己紹介を演じさせるとともに、教職課程で学んだ内容についての振り返りを口頭で行った。第２回と第３回は「教職履修カルテ」を全員が印刷して持参し、ためになった講義と改善が望まれる講義（形態や内容も踏み込んでのリフレクション）について意見を出し合った。学生は個別授業、教員の授業スタイルや内容を教員が想像している以上に観察していることがよく理解できた。

第４回からは「学校が直面する実践的・臨床的課題」と「日常的に発生する学級内の問題」、「学校外の地域や国際社会に関する問題や課題」には、いったいどのようなテーマが考えられるのかを出し合い、それらの課題をいくつかのまとまりに整理しグループを編成し、そのグループで改めて検討するテーマを確定した。平成27年度に受講生が選択したテーマは次のようなものであった。

ア）子どもにかかわる課題（いじめ、不登校、学習意欲の低下、体験活動の不足、学力の格差、理科離れ）イ）教師にかかわる課題（教師の休職、心のケア、学級経営のたいへんさ、教師の不祥事、体罰）ウ）現代社会が抱える課題（孤独死、人間関係＝コミュニケーションの不足がもたらす事件、SNS上の問題）エ）学校を取り巻く社会的問題（モンスターペアレント、貧困格差）オ）未

来展望（大震災からの復興、原発問題、オリンピックに向けて）。

そこで、本演習では各グループが選択したテーマに沿って、情報の整理と解釈を文献及びインターネットによって入手した資料をもとに50分間の学習指導案を作成するとともにパワポ資料、配付資料を作成することを課した。そしてグループでのプレゼンテーションとして、学習プリントや各種資料を配付して、授業形式での発表・話し合いを行うこと、その際、教育実習で担当したクラスの生徒たちの前で行うことを想像しながら進めることをルールとした。

●過去（１～）３年間を振り返ったなかでの特色ある取組

以上のようなテーマに基づき、受講生はさまざまに工夫を凝らした授業を展開してくれた。学習指導案を略案ではあるが作成し、本時のめあてとまとめが時間内になされるように時間の管理も十分になされていた。看護科の学生はくしゃみをしたときに菌が飛散する範囲を紙テープで示したりする等、視覚的に体感的にも他の受講生をうならせる場面も見受けられた。

【授業風景①】

【授業風景②】

●上記の内容において特に良かったと感じられたもの

上記例の他にも喫緊の課題であるSNSの対応についても力のある授業を展開したグループも散見された。（下資料参照）

●教職実践演習の課題

本演習における模擬授業は毎回盛り上がり、回を重ねるごとに受講生自身も工夫を重ねる姿勢が看取されたのは素晴らしい成果と評価できる。映像資料を見せたり、ほかの学生のインタビュー映像を投影したりする等、いわゆるIT機器を存分に活用した授業を展開できる能力はついたように思われる。もっと早くにこういう授業があったら良かったというアンケートは毎年目にする。ただ、４年後期という時期は卒業に向けた論文や研究の追い込みの時期に当たり、大学院生等は実験中に授業に参加するなど時間的な余裕がないように見受けられた。内容はさておき、開講時期の問題はかねてから指摘されてはいたが、解決には至っていないことが今年も確認された。

○事例C：社会人基礎力、とりわけ教師に求められる「チームで働く力」の育成～学校運営の模擬体験を通して～

●本教職実践演習のねらいと授業構成

大学を卒業し教員として採用される学生にとって、教職課程の授業や教育実習で学んだ理論と実践知を統合し教員としてふさわしい資質を身に付けるとともに、実際の学校運営の在り方や学校独特の組織風土などについて理解しておく必要がある。

本実践演習では、架空の中学校を設定し、受講生が管理職（校長･副校長･教頭)、教務主任などの主任･主事、第１学年から第３学年の学級担任の役割を分担し、中１の学級開きから卒業式までをロールプレイを中心に演出していくこととした。また、２つのグループに分かれ、学校教育において喫緊の課題となっている問題を取りあげ職員研修会の提案資料を作成し全体で討論することとした。

その他、職員研修の一環として教科と道徳の模擬授業を２本行い研究協議することや、模擬職員会議を開き学校における意思決定のシステムを学ぶことなども実施した。

[授業構成]　丸数字は講義回数

① 学校組織に関する教育法規についての共通理解（学校教育法、同施行規則、学校図書館法、地方公務員法、教育公務員特例法など）

② 役割分担：管理職、主任・主事、学級担任を協議のうえ決定、中学校名決定
また、職員研修会提案資料のテーマを決定（２つのグループ）

③ 学校経営案を校長が､校務分掌や週時程を教頭が、学級経営案を各担任が作成し、「○○中学校運営計画」にまとめる。

④～⑥、⑧～⑪　中１～中３までの発達段階に合わせたテーマを選択し模擬指導を行う。また、２つのグループに分かれ職員研修会資料を作成する。

⑦ 国語の模擬授業と協議会

⑪ 道徳の模擬授業と協議会

⑫⑬　模擬職員研修会(提案された資料について討論)

⑭ 教職実践演習の振り返り（個人の取組状況､「チームで働く力」の達成度評価）

⑮ 卒業式　卒業証書授与、学校長式辞、皆勤賞表彰など　教職実践演習まとめ

●特色ある取組の紹介

⑴ 架空の中学校の管理職や主任主事、各学年の学級担任などの役割を担当することによって、初めて教員側の目線で考え行動することができた。回を進めるごとに管理職同士のまとまりや、学年職員の同僚性が高まっていった。

⑵ 中１～中３までの発達段階に合わせた模擬指導の課題としては、中１ギャップ克服、家庭学習習慣の育成、情報モラルの育成、いじめ問題など幅広く設定したが、中でも中学校教員を意識して設定したのは、３年担任の学級保護者会の取組であった。受験を控えた第３学年の最初の保護者会で担任としてどのような所信表明をして信頼を得るのか。緊張した模擬指導になった。

⑶ 模擬職員会議は受講生にとって未知の体験である。議題を「朝の読書を導入すべきかどうか」と設定した。職員会議については学校教育法施行規則第48条に規定されているところであるが、円滑な学校運営のためには職員の共通理解が必要である。賛成、反対それぞれの意見を戦わせながら相互理解を図り管理職のリードによって実施することが決まった。

⑷ 最も時間と労力をかけたのは、職員研修会の提案資料の作成及び職員研修会での討論と資料の修正である。管理職＋第３学年チーム、第１学年＋第２学年チームに分かれ、それぞれ「不登校といじめ防止対策」｢学級経営と体罰｣に関する資料作りを行った。課題設定、仕事分担、資料の収集、内容の精査やレベル合わせ、能力や意欲の差の克服など受講生の負担が大きいが、これは「チームで働く力」の育成に欠かせない。発信力、柔軟性や傾聴力、情報把握力、規律性、ストレスコントロール力が試されるところである。

●上記の内容において特に良かったと感じられたもの

本教職実践演習のねらいである「社会人基礎力、特にチームで働く力の育成」の観点から特に所期の成果を挙げることができたのは上記２⑷職員研修会提案資料の作成である。例を挙げると、「学級経営と体罰」チームは公的な資料だけでなく、実際に多くの学生にアンケート調査を行いデータを収集するとともに、分析も自分たちの文章で表現できたことなど「協働性・同僚性」を十分に発揮し成果を出していた。また、このチームはいわゆるＰＭ理論による評価においてもｐｍ型からＰＭ型への変容が見られるなど、成員の満足度が高かった。

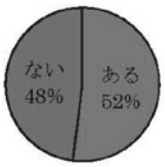
康平中学校（架空の学校）における体罰防止に関する職員研修会提案資料（一部）

P14,15

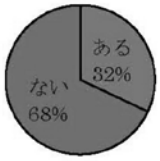
ここで体罰を実際に見たもしくは，受けたことがあるか大学生にアンケートを取ってみた。
また，体罰が必要かどうかも調査したところ驚きの結果が出た。

1，体罰を見たもしくは，受けたことがあるか。

男子



女子



※　このデータは，「体罰防止班」が福大生約40名に対しアンケート及び聞き取り調査を行ってまとめたものである。

「ある」と答えた人の実際にあった内容

〈男子〉

部活動以外

・修学旅行で寝坊し，集合時間に遅れた際に，班員全員が先生に蹴られた。
・宿題を忘れた生徒にビンタし，その後正座をさせられていた。
・小テストで簡単な問いが解けずに腕立て100回させられた。
・頭髪検査にて，襟足が伸びすぎていると言われ，襟足をつかまれて吹っ飛ばされた。
・授業中話していたところチョークを投げられ，その後たたかれた。
・中学時代に学校を抜け出した人が剣道の竹刀でお尻を叩かれていた。

部活動

・シュートを外す，声が出ていない→グーで殴られる。気合が入ってない→ビンタされる。
・格下の相手に対して，試合に 3 点差で勝ったところ，「何，手を抜いているのだ！」と怒鳴られ，その後ビンタされた。
・先生の機嫌によって態度が変わり，罵声を浴びせられたり，ビンタされたり，頭を殴られたりした。

〈女子〉

部活動以外

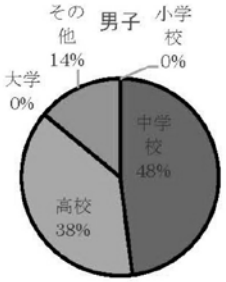
・授業中に問題に間違えたら，竹刀で物理的攻撃

部活動

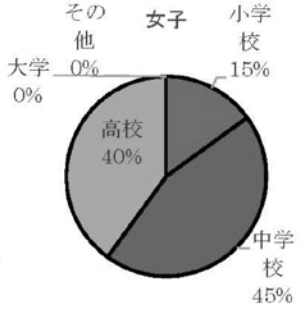
・先生の話を聞く態度が悪すぎてラケットで頭を叩かれていた。
・試合中にミスをしたり，悪いプレーをしたりすると，頭を叩かれたり，ビンタされたりした。
・部活動の指導の際，先生に平手打ちされたり，怒鳴られたりしたことで学校に行けなくなった生徒がいた。

2，上記の体罰はどの教育機関で行われていたか。

男子

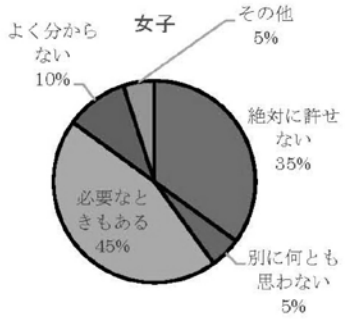


女子



その他は，クラブチーム，塾など

3，体罰についてどう思うか。



予想では「絶対に許せない」が一番多いと思っていたが。「必要なときもある」と考えている人のほうが多かった。その意見として，自分が悪いことをしたから怒られたので仕方がない。怒られて気合が入り見返してやろうという気持ちになったという意見があった。中には自分のことをちゃんと叱ってくれたことに対して，感謝しているという意見もあった。ただ，体罰は絶対に許せないという意見では，体罰をされて恐怖を覚えたという意見もあり，人により体罰の受け取り方が大きく違うことが，アンケートから分かった。

康平中学校での対策（まとめ） p24

今回体罰について調べたところ、体罰が行われる場面では部活動が一番多かったが、思った以上に授業中も多いことが分かった。授業中では、宿題をしていない生徒やしゃべっている生徒に対してチョークを投げたり、叩いたりなどの体罰が行われていた。部活動では、生徒の頬を殴るなどの大きな怪我につながりかねない暴力が多くあった。また部活動で体罰が行われる背景として、教師が暴力を振るうことで部活動での結果につながっていたことにより、保護者も容認してしまっていたことが挙げられる。さらに体罰を受けたことがある大学生も全員ではないが、体罰を受けたことで気合いが入った、見返したいという気持ちになれたという意見もあった。しかし、その一方で体罰を受けて学校に行けなくなった、恐怖を感じていた生徒もいた。暴力を振るって強くなるチームは、本当に強いチームではなく生徒を力で抑えて込んでいるため、そのような指導は決してしてはならない。本当に強いチームは生徒が主体となり、自分で強くなろうと努力できるような環境を教員が作ることでできると考える。

康平中学校においても、部活動が盛んであり昨年も優秀な成績を収めている。また勉学においても、生徒が希望通りの進路を進んでいる。今後さらなる飛躍を期待するために、康平中学校では決して体罰のない指導をし、生徒には恐怖を与えず、力いっぱい自分の能力を発揮できる環境を用意することが必要である。

そのための体罰防止対策としては以下の通りである。

く体罰防止策〉

・イライラしても決して手を出さず、一度深呼吸して怒りを静める。
・つらいことがあれば一人で抱え込まず、必ず他の教員に相談する。
・態度が悪く指導しても一向に改善されない場合であっても、他の教員と協力し体罰をせず根気強く指導する。
・個人用チェックシートを本校でも実施し、体罰の意識を高める。
・体罰は手を挙げることのみではなく、言葉の暴力もあるので、言葉遣いには注意する。
・部活動の指導に当たっても、顧問のみならず副顧問も共に指導を行うようにする。
・「イラッと日記」をつけてどのタイミングでイラッとするのか、また何に対して怒りやすいかを見つけ出し、怒りそうになった時に日記の内容を思い出し体罰を抑制する。

康平中学校をよりよい学校にするために、教員一同力を合わせて頑張りましょう。また先生方は一人で抱え込まず、何かあれば必ず他の先生に相談するようにし、体罰のない学校を皆で作っていきましょう。

●教職実践演習の課題（開講形態、学生の反応を含む）

本教職実践演習の開講形態については、「教職課程最後の授業としてこの講義形態がとても良かった。」「学校運営の一端を学ぶことが出来てよかった。」、「チームのメンバーとよい関係を築くことが出来、楽しく取り組むことが出来た。」など肯定的な感想が多かった。課題としては、卒業後すぐに教職に就く学生と教職指向性が薄い学生との温度差があげられるが、チームを作ることによって学生相互の高め合いと連携を図ることができると考える。

○事例D：

●授業の構成（15回分）

本演習は、教職課程の総まとめの科目として、４年間の教職課程で学んだ知識と教育実習での経験をもとに、現在の学校教育が直面する課題に対して、教師としてどのような実践が求められているのかを、討議やロールプレイを通して検討した。

前半は、VTR視聴をもとに生徒指導の課題や教師に求められる資質などについての討議を中心に、後半は、不登校・いじめ・特別支援教育・学力問題などのテーマで受講者の発表をもとに、討議を行った。実際の15回の授業の流れは、以下の通りである。

＃１：オリエンテーション（授業の進め方）
＃２：発表テーマのオリエンテーションと日程決め
＃３：教職課程の学習の振り返り（履修カルテをもとにした討議）
＃４：学校の実践的課題（教育実習等の体験をふまえての討論）
＃５：教師に求められる資質（VTR視聴をもとにしたディスカッション）
＃６：生徒指導についての課題（VTR視聴をもとにしたディスカッション）
（＃７～14各課題テーマの発表及びディスカッション）
＃７：いじめの理解と現状―学年を超えた指導のあり方について―
＃８：子どものコミュニケーション能力の向上を目指して
＃９：キャリア教育―今後のグローバル社会に対応する人材の育成―
＃10：不登校の理解と対応
＃11：保護者対応―モンスターペアレントの現状と課題―
＃12：発達障害と特別支援教育
＃13：学力問題―児童生徒の学習における現状と改善策―
＃14：フリーターやニート問題の解決のために中学校・高校でできること
＃15：まとめ

●発表テーマの事例紹介

＃11：保護者対応―モンスターペアレントの現状と課題―

モンスターペアレントの定義、現状（モンスターペアレントの分類、その背景や学校側の対応とその課題等）について、発表者（受講者２人１組）がプレゼンテーションを行った。また、具体的な事例（担任の指導に対する不満、学校教育活動中の事故等）をもとに受講者全体で討議し、その課題について検討を行った。

最後に、「携帯電話を没収した先生に対する保護者からの苦情」という事案で、電話及び直接面談の場面設定をし、受講者それぞれが担任教師・保護者などの役割でロールプレイを行い、それをもとに討議を行った。

●本授業の成果（受講者の感想から一部抜粋）

・「実際に現場に立った時にどうするか、どうしたらいいのか」という事を常に前提に置いておくことで、現実に可能なのか、自分にはその行動ができるのかなど深く考えることができた。

・様々な発表を聞いてみて、素直に思ったのは、知らないことが多すぎると言うことです。今まで教職の授業を受けてきて学習しているはずの内容であったにもかかわらず、分からないことが多くありました。実際に自分で調べた発達障害の内容に関しても、発達障害のそもそもの意味も曖昧で、またどんな取り組みがされているのかも曖昧でした。この発表を通して、今まで学習をしてきた教職の学習内容の復習もでき、自分の意見・疑問がわかってきたので有意義だったと思います。

・この授業を通して、これまでの教職の授業の中で学んできた内容や現在の学校に見られる問題点について、より身近なものとして考えることができた。また、テーマをまとめる方法やプレゼンの形式などでも、様々な視点から１つのテーマについて考え、掘り下げることができたので、とても充実した授業でした。発表の後のディスカッションの時間では、それぞれが感じたことや体験したことなども共有できて面白かったです。また、その内容について先生が現場の教員をなさっていたときの体験談や経験も聞くことができたので、自分が実際の教育現場に出たときに参考にできたらと思います。いろんな生徒がいるように、教員もいろんな人がいて、それぞれ多様なアイデア考え、知識や経験を持っているので、このようなディスカッションの時間は教員になってからも必要だと思います。こんな風に教員同士で考える時間が増やせたら、もっと質を向上させることができるのではないかと思いました。

・前半ではDVDを観ての感想や考えを発表していくということから、他の授業とは違い、自ら発言するということからとても勉強になった。特に他の受講者の意見を聞くことで、非常に興味を持てるディスカッションであり、よい講義でした。後半でのテーマを決めて１回１回の発表する授業でも、１つのテーマに対して深く考えたりいろいろなデータを見つけることで、今の教育の現状を知ることができた。また、これからどうしていけば良い方向に行くか考えることができたことは、教員を目指す上で、非常に役立っていくと思った。

●まとめ

本演習では、４年間の教職課程の総まとめとして、学校教育の課題についての少人数での発表とそれをもとにした討議を行った。受講者の学生の感想からは、それまでの教職課程科目受講時と異なり、受講者同士で討議を行う中で、学校教育におけるさまざまな課題を、教師として、どうとらえ・どうするのかという実践的な検討を試みる機会になったと考えられる。

後半の授業は、２人１組で設定したテーマで発表を行わせた。発表の準備を進めるにあたって、学生は、それまでの教職課程科目で習得した知識を整理し、その課題や問題点を明らかにしなければならない。最低限、そのことが担保されていなければ、授業での討議の質に影響すると考える。今回の授業では、各グループの発表前に、発表資料（レジュメ）等を担当教員がチェックし、発表者にフィードバックすることで、ある程度の発表と討議の水準を確保できたと考える。

○事例E：「特別の教科　道徳」実施を視座に据えた教職実践演習

●教職実践演習の基本テーマの設定

本学における教職実践演習履修学生は、文系学部、理系学部、医療系（看護）学部、スポーツ系学部と多岐にわたり、取得する中等教員免許の教科も多様である。それ故、担当する実践演習で教科を特定することは、その教科に直接関係しない学生にとっては興味のないものになることが多い。

平成27年７月に文部科学省は、学習指導要領を改定し、平成31年４月から中学校において「特別の教科　道徳」（道徳科）を実施することを決定した。道徳（科）は、全教職員によって取り組まれるものであることから、全ての履修学生に関わってくる。そこで、道徳科を中心に実践演習を組み立てることにしたが、道徳科といっても内容は幅広い。

『中学校学習指導要領解説　特別の教科　道徳』は、その第３章「道徳科の内容」第２節「内容項目の指導の観点」の「６思いやり、感謝」のなかで「『人間尊重の精神』は、互いの存在を、強さも弱さももち合わせた生身の人間として、肯定的に受け止めようとする思いが普遍化されたものである。それは、人間尊重の精神、生命に対する畏敬の念に基づく人間理解を基盤として、他者に対する思いやりと感謝の心を通して具現化される」としている。この「人間尊重の精神」や「生命に対する畏敬の念」は人権や平和を尊重する道徳教育となる。本実践演習では「人権と平和」を基本テーマにした。

●平成27年度の全15回の内容

15回の授業内容は以下の通りである。

１）ガイダンス：教職実践演習の内容とその重要性について

２）グループ討論：教職履修カルテの見直し・反省点１「教職課程での学び」

３）グループ討論：教職履修カルテの見直し・反省点２「これからの学び」

4）グループ討論：教育実習での成果と課題１「教師としての在り方生き方」
5）グループ討論：教育実習での成果と課題２「学校経営・学級経営の在り方について」
6）模擬授業「原子爆弾投下を通して平和について考える」
7）模擬授業「杉浦千畝を通して命の尊さについて知る」
8）模擬授業「キング牧師を通して人権について考える」
9）模擬授業「動物愛護センターから命の尊さについて考える」
10）模擬授業「道徳化の内容『四つの視点』から『自分を知る』について」
11）模擬授業「ノーベル平和賞受賞者マララさんについて」
12）模擬授業「佐賀の『がばいばあちゃん』から清貧と人権について知る」
13）模擬授業「知覧の特攻平和会館から平和の尊さを考える」
14）グループ討論：教科指導のあり方、教師の実践的指導力向上とは
15）まとめ：教師として生きていく決意の表明

●実践演習実施の概要

１．教職履修カルテをグループで振り返らせた。学生たちは、最初は嫌々だったが、学年があがるにつれて教職の意義や重要性に気付くようになったとする意見が多かった。以下はそのような学生のコメント。

教職履修カルテを見直すと、年々教育現場の実態を学んでいるように感じた。また、講義を受けるなかで自分の教育に対する考え方や指導観などを考える機会を得ることができたと思う。（スポーツ科学部）

教職カルテは、最初はただ埋めることしか考えていませんでした。なぜこんなことをするのかと思っていたけど、今は、今まで学んできたことを振り返ることのできるデータとして見られるようになりました。どの講義も教員になる上では欠かせない内容のものであり、もう一度聞いてみたいと思う講義がいくつもあります。（人文学部）

２．教育実習での学びもグループ討論のなかで振り替えらせた。学生たちは教育実習を通して、教師は学校でただ授業をしているのではなく、授業準備、保護者への対応、部活指導など様々な仕事で忙殺されている現状を知った。多忙ななかでも使命感に燃える教師をみて、自らも教師になりたいと希望するようになっている。以下は、そのような学生のコメントである。

教育実習に行ったことにより、教員という職業の素晴らしさと大変さをひしひしと感じることができた。同じ授業をしてもクラスが違えば進め方も変わってくる。予定していたように授業が進まず、生徒のやる気を引き出せなかったりしたとき、教材研究や授業見学の重要性を感じた。授業以外にも仕事は山積みされており、体育祭などの学校行事もあって、本当に驚いた。しかし、生徒からはとても元気をもらった。やはり教師はいいと思った。（理学部）

実習で一番困ったのは、生徒に対する指導でした。きとんと注意しないといけないけれど注意して生徒に嫌われたくないという思いがあり、なかなかしっかりとした注意が出来ませんでした。教師の仕事は、教えることだけでなく、行事の裏方など数多くあり、教師の多忙性の一部を垣間見ることが出来ました。そんななかでも教師として資質向上を求められる大変さを実感しました。（スポーツ科学部）

３．模擬授業では、単なる講義形式は避けるように指導した。道徳科の『学習指導要領解説』では、「問題解決的な学習など多様な方法を取り入れた指導」を求めていることからも、班での相互学習など、アクティブ・ラーニングをこころがけさせた。模擬授業の実践例として、「杉浦千畝を通して命の尊さについて考える」を紹介する。教材としては文科省による『私たちの道徳　中学校』に掲載されている杉原千畝の手記が用いられている。模擬授業は、『私たちの道徳』に掲載されているアンネ・フランクを紹介しながら当時の時代状況について触れ、杉原の葛藤を自分自身の葛藤に自己投影させるかたちで進められた。そして班で自由に考えさせながら全体での討議に移った。以下は、学生のコメント。

授業を受けて一番感じたのは、「生徒にこの授業を通して何を理解させるのかを明確にする必要がある」ということです。生徒に教えるためには、教える側が十分に知識を準備しておくことが大切だということも今回学べました。数学など、答えがある授業とは違い、これといった正しい回答がない内容なので、教える側も大変だと思いました。声も大きくて聞きやすく、時間が足りなくなっても慌てず、生徒役の学生に最後まで考えさせようとしている部分は良かったと思いました。黒板の板書計画をもう少し考えておけば良かったでしょう。（人文学部）

導入の部分で、当時の情勢などをもっと詳しく説明していたら良かったと思います。千畝の後悔には、満足感ではなく、「もっと多くの人を救えなかったのか」という葛藤があったと思いました。ビザ発行の際は、ただの正義感からではなく、苦しみ抜いた末の決断であって、悩みながらためらいながらビザを発行したという解釈もあっていいと思う。道徳では予定調和的に結論があってはいけないと思う。（経済学部）

教職実践演習　模擬授業

特別な教科　道徳　学習指導案

授業担当者：・・・
平成 27 年 12 月 27 日

1．単元名　杉浦千畝を通して命の尊さについて考える

2．単元設定の理由
○単元観・題材観
本単元では、第二次大戦時にリトアニアで領事をしていた杉浦千畝が勇気をもった行動で多くの人々を救った事実を知ることによって、生命の尊さや勇気の大切さを学ぶことが出来る。
○生徒観（教職実践演習履修学生）
本学級の生徒（教職実践演習履修学生）は、全体的に活発な生徒が多く、教師の発問にも積極的に応答する。とくに男子は積極的に発言し、道徳の学習に取り組む姿勢が窺える。女子に関しては、発言回数は少ないものの授業内容への理解力は優れており、授業の説明にはよく反応している姿が見られる。しかし、授業の後半になると、集中力を切らしている様子が見られるため、生徒の集中力を最後まで持続させるためにも生徒が積極的にグループ内で考えたり、発表する機会を設けることが重要であると考える。

3．本時の指導目標
○領事としての職責と人間としての良心の間で揺れる千畝が、勇気をもち人々を救う決断をしたことを学び、生命の大切さについて改めて理解することができる（知識・理解の能力）。

4．指導上の留意点
○教師の発問を理解しているか確認する。
○班のなかで孤立していないか、班全体の学びに参加しているかどうか確認する。
○導入、展開、まとめが一つの流れになるように説明を工夫する。

5．教材
○文科省『私たちの道徳　中学校』
○『杉原千畝記念館パンフレット』

6．学習の展開（学習指導過程）

	学習活動・内容	指導上の留意点	学習形態	評価基準
導入5分	○アンネ・フランクについて知っているかと聞く。	○アンネや隠れ家の写真を見せて興味を引かせる。	全体	○しっかり聞く態度があるか。（感心・意欲・態度）

	学習活動・内容	指導上の留意点	学習形態	評価基準
	○当時のドイツの状況とユダヤ人迫害について理解する。	○単なる過去の事実という認識に終わらせずに、今でもあり得る事態であることを認識させる。	全体	○当時の状況を理解しているか。（知識・理解）
	○ユダヤ人の願いを聞き、領事としての職責と人間としての良心の間で揺れる千畝の気持ちを考える。	○千畝の立場にたって、自分自身の問題として考えさせる。	班	○班のなかできちんと自分の意見を言えているか。（表現） 千畝の葛藤を自分の葛藤として理解しているか。（理解）
	○通過ビザを発行した千畝の気持ちには何があったのかを行動や言葉から汲み取る。	○処刑される可能性や外務省を馘首される可能性があったことに留意させる。	班	○班のなかできちんと自分の意見を言えているか。（表現） 千畝の立場をよく理解しているか。（理解）
	○戦後、外務省から退職の勧告を受けた時の千畝の気持ちについて考える。	○自分だったら出来たかどうかを考えさせる。	全体	○いろんな意見が出ている中で自分の意見を出せるか。（表現）
	○本時の復習とまとめ	○本時の内容のまとめとして、命の尊さや勇気について考えさせる。	全体	○現代的な問題として、自分の生き方の問題として理解できたか。（理解）

●教職実践演習での学生の学び

学生同士が、教職課程の授業で学んだこと、考えたことを互いに意見交換する当実践演習は重要であった。とくに本学のような一般大学で学部学科の母体がない教職課程ではそうであろう。彼らは、教職カルテ、教職課程の授業、教育実習、介護体験や、スクールサポーターなどのボランティア活動によって様々なことを学び、自らの教育観や教師観を育ててきた。教職実践演習は、そのような彼らの最後の学びの場となった。

とくに教育実習後に学生間で模擬授業を行い、学生の目線で学生の授業を相互に批評することは新鮮であり、学生には貴重な体験になった様である。以下、学生のコメントを紹介して終わりたい。

この演習を通して教材研究の重要性をあらためて感じました。専門教科ではない道徳ということもあり、勉強になることがたくさんありました。他の授業者から学ぶことがたくさんあり、着眼点もどんどん変化したように思いました。他の人の授業を見る機会もなかなかないので、このような機会がもっとあれば良かったなと思います。ますます教員になろうと思いました。（スポーツ科学部）

教職課程は、必修科目ではないので、学部の仲間でも取っている人は少数です。だから、教職の授業や教育実習について話したり、悩みを言ったりする相手がいなくて戸惑うことも多くありました。でも、この演習では、教職カルテに書かれていることを互いに見せ合ったり、教育実習での経験を話したりすることで、みんな同じようなことで悩み、つまずいていることを知ることができ良かったと思います。そして何よりも教師になりたいという気持ちが強くなりました。（人文学部）

○事例F：

●平成27年度の授業構成

「養護教諭として現場で必要とされる資質とは」をテーマとして、以下のような授業を構成した。授業に当たっては、学生の主体的な学習を導くために、授業内容に沿ったワークシートを作成した。

＜「教職実践演習（養護教諭）」の授業構成＞履修者18名

第１回～第２回　オリエンテーション・履修カルテ確認、振り返り

第３回～第４回　学校保健と児童生徒の実態（養護実習の体験を踏まえた討議）

第５回　救急処置のグループワーク（リフレクティブシートの活用）

第６回～第７回　児童生徒の心身の健康課題の明確化と保健指導

第８回～第10回　課題解決に向けてのロールプレイング

（児童生徒の健康相談での困難例、葛藤を生じた場面）、グループ討議・全体会
第11回～第14回　課題解決型の保健室経営計画作成と保健室機能の研究
第15回　養護教諭の役割（まとめ）

●特色ある取組

『教職実践演習』の趣旨とねらいに示されている「教員として求められる４つの項目」（文部科学省）のうち「使命感や責任感、教育的愛情などに関する事項」「社会性や対人関係能力に関する事項」「児童生徒理解」の３項目の育成を目指して、「養護実習において保健室で健康相談に困難を感じた事例、特にジレンマ（葛藤）を感じた場面」のロールプレイに取り組んだ。

実践方法は、まず学生が履修カルテや講義内容、養護実習を振り返って、特に印象に残った事例についてワークシートにシナリオ作成する。講義では、そのワークシートレポートをグループ内で発表し、相互に振り返るものである。例年、グループ内発表では単に感想を述べるにとどまり、自分自身がどうすべきかまで深く掘り下げることができなかった。そこで今年度は、グループ討議用の「リフレクティブシート」を作成し、自己への気づきやなぜそのようなことが起きたか、どうすればよかったかについての討議を行った。その後でグループで最も印象に残ったテーマを選定し、ロールプレイを行った。

学生が選択したロールプレイのテーマの一例をあげると「バイタルサインが正常なのにベッドで休みたいという生徒への対応」「養護教諭不在時に救急車を要請した場面に遭遇して」「過呼吸症候群にペーパーバックを使おうとする担任に対する実習生のジレンマ」「保健室登校の児童への対応」等である。

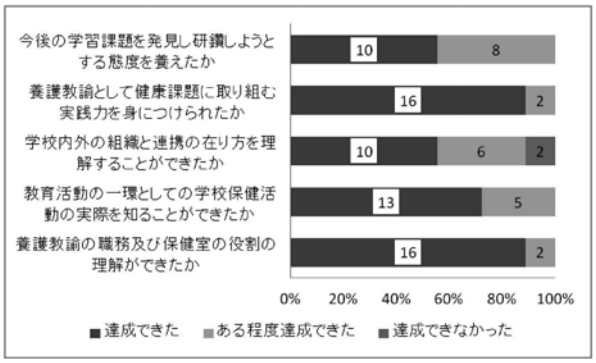
●上記の内容において特に良かったと感じられたもの

最も印象に残った取組は、学生がジレンマを感じた実習中の「リストカットをする生徒への対応」をテーマとしたロールプレイである。教科書だけでは理解できない生徒の実態や状況に合わせる難しさが、ロールプレイの中で再現できており、養護教諭としての自らの対応課題はもとより、生徒や担任の立場に身を置いた理解に繋がった意見が出されていた。ロールプレイ後の感想を簡単に紹介する。「やはり看護や医学的知識を理解しておくことが重要だとわかった」。「手首を切ったことに余り過度に反応することはよくないとは理解しているつもりでも、実際にはそのことを本人にどこまで触れていいのか実習中はよくわからなかった･･･でも養護教諭の先生が『そういう時はくまちゃんをぎゅっと抱くって約束したでしょう』と言われていたように（略）生徒の気持ちを受け入れつつも、さりげない言葉かけで、自傷に代わる行為を引き出すことが大切とわかった」等と語られた。この実践の取り組みの成果については、実践を重ねて検証していきたい。

●「教職実践演習（養護教諭）」担当者の振り返り

平成27年度に本授業内で行った「養護実習後の養護教諭としての職務に関する調査」によれば、「学校内外の組織との連携の在り方」やその方法の理解が他に比べてやや低かった（図F-1）。養護教諭は一人職が多いことからも、今後は教職員と連携する態度やその実践力を育成することが重要な課題である。

なお、本科目は、「必要に応じて養護教諭養成に関連する教科担当者及び教職に関する科目担当教員が連携して、授業の内容調整及び展開に関する協議を行うことが望ましい」とされている。しかし現状では、他の教員の参加・協力は得られていない。そこで、３月の春休み期間に、学外の現場養護教諭のご協力を得て、３年生の養護実習事前指導と兼ねて卒業前演習の機会をいただいている。残された課題は多いが、学科教職課程の目標である「養護教諭として児童生徒の健康に貢献すること」ができるよう、授業の改善に努めたい。



図F-1　教職実践演習における調査（目標）

○事例G：

●授業構成

回	授業内容
1	イントロダクション（授業の到達目標の確認、演習の進め方の説明） 学期中に市内の学校で開催される公開授業に参加し、レポートにまとめることを指示
2	履修カルテの確認 教育実習の経験から見えてきた自分自身の課題の整理と討論
3	学校が直面する実践的・臨床的課題の検討

回	授業内容
4	４グループに分かれ、各グループごとで扱う教育課題（テーマ）の決定と作業手順・役割分担の確認
5	各自がテーマに沿った基本的な概念・用語を抽出し、取捨選択 ディスカッションを通じてテーマごとに30個程度に絞り込む
6	各概念・用語の意味や関係する資料をまとめたものを持ち寄り発表
7	グループごとに発表のための資料作成
8	グループごとのテーマについて発表・討論(1)
9	グループごとのテーマについて発表・討論(2)
10	各テーマに関連した指導案の作成（模擬授業とすることが困難なテーマについては、校内職員研修の計画として構成する）
11	学習指導案に基づく模擬授業と討論(1)
12	学習指導案に基づく模擬授業と討論(2)
13	模擬職員研修と討論
14	教育課題の振り返りと公開授業参加の報告
15	教員としての資質能力の確認、まとめ

2015年度は、以下のような内容で演習を行った。

・教職履修カルテの確認を行い、各自の教職課程での学修のふりかえりと学生自身の課題の確認を行った。
・学期中に福岡市内の学校で開催される公開授業の一つに参加して、レポートをまとめることを課した。
・演習の中心的活動としては、数名のグループに分かれて、教育における課題についてまとめさせ、模擬授業等の形で発表させた。

●教育課題の設定と模擬授業等の内容

教員側からいくつかの教育上の課題を例示した後、数名ずつのグループに分かれて、各グループごとにテーマを決定させた。2015年度のテーマは「不登校」「体罰」「いじめ」「自殺」となった。

最初に、各テーマについて内容をまとめさせた。キーワード（鍵概念や専門用語）をリストアップした上で、各自がメモを作成した。持ち寄ったキーワードを共有してディスカッションを行い、30程度のキーワードに集約した。これをもとにグループごとに資料を作成した上で、発表と討論を行った（表G-1、表G-2参照）。

次に、中学校あるいは高等学校を想定した模擬授業の指導案を作成した（表G-3参照）。ただし、生徒に対して授業のテーマとして直接扱うことが難しいものについては、教員の校内研修を行う形の研修計画を作成させた。

表G-1　学生の作成した不登校児に対する登校刺激のまとめ

登校刺激

登校刺激とは、登校するように周囲の者が言葉で勧めること、登校の準備を手伝うこと、登校しなければならないと圧力をかけること、強引に学校へ連れていくことなどを意味する。

登校刺激を与えることについて、これまで賛成する意見もあったが、反対する意見の方が強かった。登校刺激を与えると、子どもの心の安定が乱れて不安を強めてしまうことが心配されたからである。したがって、登校しないことを厳しく叱ったり、強引に学校に連れて行こうとすることは、厳しく批判されていた。この考え方は十分に理解できるし、子どもの気持ちを無視した方法は逆効果を招く恐れが強い。

しかし、このような考え方のみでは、学校に復帰させることが後回しにされ、不登校が長引くことになる。さらに、二次的な要因によって不登校が深刻化するという側面もある。

登校刺激の危険性については十分注意しながらも、子どもの状態に合わせて登校を容易にさせるような働きかけを行うことは重要である。

表G-2　学生の作成した自殺予防に関する資料の一部

自殺予防の３段階

１．予防活動　自殺を防ぐための日常の予防教育
　生徒が自殺に対する適切な知識を持ち、危機に対応できるようにする
２．危機対応　自殺の危険に気づき対応する
　自殺の兆候
　・最近、家族の誰かが自殺した
　・最近、悲惨な悲劇的なできごとを経験した
　・自殺をほのめかした（直接または間接的に）
　・学校での行動が急に変わった
　養護教諭やスクールカウンセラーによる対応、医療機関への受診
３．事後対応（ポストベンション）
　生徒、保護者、教員の心のケア
　群発自殺の予防

表G-3　学生が作成した自殺予防教育に関する授業案の一部

	学習活動	時間	指導上の留意点
導入	・生徒に発問 「自殺の１番の原因は何だと思いますか？」 （例）　ストレス　いじめ （答）　健康問題 ・自殺全体の原因の割合の表を見せる １位　健康問題 ２位　経済的理由 ３位　家庭問題 ・１位の健康問題について着目する 病気の悩み（うつ病） 病気の悩み（身体的） ・うつ病について生徒に発問 「うつ病とはどのような病気でしょうか？」 （例）うつになる　テンションが低い　暗い ・内容を説明する うつ病とは 抑うつとは 自殺の防止について考えてみよう	15 分	・自殺の実態を理解させる ・うつ病についてしっかり学べているか
展開	・10 代の自殺の原因を見せる ・資料をふまえて 周りの人が死にたいと言ったら、どうするか考えさせる ・その場合どうすればよいのか説明する 話を聞いてあげる 相手の気持ちを真剣に聞く （略）	25 分	・まず一人で考えて、周りの席の人と話し合わせる
終末	・感想を書く	10 分	

●授業後の学生の感想

「今日の発表を聞いて、教師になってぶつかる問題ばかりで、ためになる部分もあった。その反面、まだまだ知識が必要だなと思った。私自身、多くの問題に向き合った時に、まだ自信はない。」

「実際に模擬授業をしてみて、とても難しかった。自殺の班で、『みなさんもうつ病になる可能性があります』という一言で身近なことと思わせて興味を引くというのは、難しい題材だと特に大事であると思うので参考にしたいと思った。」

「『こうすればよい』『こう言えばよい』といったことではないため、とても難しいと感じた。今の自分には不登校の子どもへの対応がうまくできる自信がない。先生って大変だなと思った。」

「『いじめ』のグループの発表では、なぜこの発問や作業をするのかがはっきりしていて、生徒に伝えたいことがしっかり伝わる授業になるのではないかと思いました。」

「不登校の対応に関しては少し内容が薄いかなと思ってしまったが、登校刺激や適応指導教室など、初めて聞いてためになったこともあったのでよかった。」

●公開授業参加体験の報告

授業期間中に市内で行われた公立学校の公開授業に参加させた上で、レポートにまとめさせた。授業の中では体験を共有し、議論を行った。公開授業の参加にあたっては、学生自身の免許状の教科や校種とは異なるものを選ぶよう勧めたところ、小学校や特別支援学校などを選んだり、複数の教科の授業に積極的に参加した学生が多かった。

●公開授業参加体験レポート

F市立A小学校で行われた公開授業を見学した。授業内容は、１・２年生は「生活科」、３～６年生は「総合的な学習の時間」であり、研究主題は「学校と地域の架け橋づくりをめざした教育の創造～一人一人の学びを大切にした授業づくりを通して～」であった。（中略）小学校に到着してまず初めに思ったことは、「先生同士のつながりって重要だな」であった。学校に到着すると、すでに近隣の小学校の先生や教育委員会の方がおり、「どうもお久しぶりです。あれからどうでしたか？」「○○先生の授業、楽しみですね」などといった会話があらゆるところで交わされていた。一人ぼっち状態の自分がとても場違いであると感じたと同時に、「これからいろんなところでいろんな先生方と関わっていくのか」と強烈に実感した。授業が始まってからは、教育実習で見てきた中学生の様子と異なる点が見受けられた。中学校では先生の問いかけに対してほとんどの生徒が反応を見せていなかったが、小学校では我先にとほとんどの児童が手を挙げていた。この光景を見て、とても懐かしいなと感じた。（中略）今回の公開授業で私が一番思ったことは、「早く先生の一員になりたい」であった。教師の仕事が大変であることは理解しているし、今の段階で自分に自信が持てていない。しかし、精一杯努力して少しでもこの中にうまく加わりたいと思った。

今回、授業公開・協議会で特別支援学級を選んだ。年々特別支援学級の児童・生徒が増えていて自分自身が発達段階の遅れている児童や、障害のある児童をもつときにどうしたらいいのかという思いがあり参加したが、確かに普通学級で生活している児童より落ち着きはなくそれぞれの得意・不得意ははっきりしていたが、普通学級で生活している児童より遥かに人とコミュニケーションをとる能力は高く、１人で作業するのは効率よく行えていた。授業を行うにあたってどんな児童・生徒でも約束事を決め、効率よく進めるために工夫を常日頃から行うことが大切なのだと思った。B小学校の学校と地域の架け橋づくりを目指した教育の創造はとても興味深く今後教育を行う上でとても大切なものなのだと今回の授業公開・協議会を通して学ぶことができ、とても勉強になった。

●まとめ

教育課題として学生が選んだテーマは、教育実習の体験や社会の動向から、教師として直面する課題ではあるものの、学生自身に不安の残るものが選定されていた。教職課程の講義等で概要は学んでいるが、具体的な場面における対応については自信がないとの声が多かった。学生自らが調べてディスカッションを行ったことで、各教育課題が相互に関係していることを認識したようである。特定の場面における対応方法だけでなく、教育活動全体の中で諸課題を統合的に把握し、対処することを学んだと思われる。

公開授業への参加では、教育実習とは異なる視点で学校現場を体験したことで、教師としての責任を自覚することにつながり、教職に就こうとする学生にとって刺激になったと考えられる。

○事例H：

●授業構成

第１回　オリエンテーション（授業に関する説明、アイスブレーキング）
第２回　ディスカッション⑴履修カルテから自分の強みと弱みを分析しよう
第３回　ディスカッション⑵履修カルテから自分の強みと弱みを分析しよう
第４回　ディスカッション⑶教育実習を振り返るグループワーク
第５回～第14回　模擬授業
第15回　ディスカッション⑷目指す教師像

●特色ある取り組み

グループディスカッションに力点を置き、授業を進めていった。第２回、第３回の授業では、特に履修カルテを活用して、教職課程での学びについて振り返りを促すことから始め、履修カルテの振り返りから自分の強みと弱みを分析することを目的にディスカッションを行った。第２回では、自分の履修カルテを確認し、「これまで自分が何を学び、何が難しかったのか（理解が十分でない…etc。）」、ワークシートに書き出した。それを踏まえ、現段階の自分の強みと弱みを整理し、自己分析を通して教職に就くにあたっての自分にとっての課題を抽出し、それをまずグループで、そして全体で共有した。第３回には、第２回の授業で挙げた課題の中から、グループで解決策を考える課題を２つ選び、「今、解決に向けてどのようなことに取り組めるか」、「教職に携わりながらどのように取り組むことができるか」という観点からグループディスカッションを進めていった。

第４回の授業では、教育実習を振り返ることを目的にグループワークを進めた。「教育実習に行く前はどのようなことが不安／心配でしたか」、「教育実習中に指導教諭や他の先生から、どのようなことを指摘されましたか／どのようなことを学びましたか」、「教育実習を終えて、当初の不安／心配はどのように解消されたと思いますか。あるいは解消されなかったとすれば、それはなぜだと思いますか」、「教育実習を終えて、自分が大きく成長したと思うことを挙げてください」、「教育実習に臨む後輩にどのようなことを伝えたいですか」という問いにま

ずは自分で取り組み、その後、グループで共有していった。特に、教育実習中に指摘されたことや学んだことについては、①授業面、②生徒指導面（生徒との関わりの場面）、③その他（部活など）と分けてメモを作るようにし、グループの学生が多くを共有できるようにした。

第15回の授業では、自身が目指す教師像を改めて考え、それに対し、今の段階で何がどの程度達成できているのか、そして何が足りないと考えるのか、自己分析し、グループディスカッションを行った。また、「自分の目指す教師像に到達するために、福大の教職課程でどのような授業（学びの機会）が提供されていればよかったと思いますか。自由に挙げてください」と最後に問い、本学の教職課程について意見を求めた。

授業期間中は、各授業の振り返りを記入する「教職実践演習」振り返りシートを活用した。これは「授業で学んだこと、考えたこと等（自身の課題について、資質能力について、授業力について等）」を毎回記入し、最後に「教職実践演習全体を通して学んだこと、気づいたことについての自己評価」を行う１枚ポートフォリオの形をとったものである。毎回のディスカッションやグループワーク、模擬授業について、授業後の内省を促すことを目的に活用した。

2015年度は模擬授業の回数の関係で行わなかったが、2014度は今日的教育課題に関する取り組みとして、自分の担当するクラスに性的マイノリティの子どもが在籍していた場合の対応についてグループワークを行った。2014年６月には文部科学省も「学校における性同一性障害に係る対応に関する状況調査について」報告書を出しており、性同一性障害をはじめとする性的マイノリティの子どもへの対応もこれからの教師には求められる。グループワークでは、実際の学校における支援事例を参考に、子どもの様子を受講生に示し、検討した後、支援事例の論考を全員に配り、実際にどのような支援が行われたのかを確認した。なお事例については、眞野（2013）を参考にした。

●特に良かったと感じられるもの

履修カルテを活用した振り返りを行い、教職に就くにあたっての課題を授業の最初で実施したのは、その後の模擬授業を見るための意識付けや視点の提示になり効果的であった。受講生がグループディスカッションの際に検討する課題として選択したものは、指導法やICTの活用、SNSといじめの問題といった教育における今日的課題に関わるものであった。

指導法やICTの活用に関しては、その後の模擬授業で、受講生のうちの１人がデジタル教科書やパワーポイントを活用した中学校社会科の授業を行ったことで、デジタル教科書の活用や教材づくりについての情報共有が進められた。また、教育実習先の中学校で電子黒板の活用を求められ、数学科の授業を行った受講生もいたことから、経験の共有が行われた。

SNSといじめの問題に関しては、例えば、LINEやFacebookの正しい使い方を自分たちが知り、子どもたちに考えさせることやネットパトロールの活用などがグループディスカッションのなかで挙げられていた。生徒一人一人の人間関係をしっかり把握するために、LHRや自分の担当する授業で子どもたちと向き合い、話をすること、いじめの問題は教師だけで対応するのが難しい場面もあるため、教師、保護者、地域が連携し、子どもたちを見守ることなども挙げられていた。

基本的に、どのディスカッションの時間も、まずはグループディスカッションを進め、最後には必ず全体共有を行っていた。自分たちのグループが取り組まなかった課題に対しても、さまざまな意見を聞くことができ、それに対する質疑応答の時間もとったことで、グループ間のディスカッションも深まっていった。

●教職実践演習の課題

2014年度、2015年度と教職実践演習を担当し、ディスカッションと模擬授業に重点を置いた演習を行ってきたが、授業を実施する上での課題を若干挙げておきたい。

まず、受講生の数である。筆者は教職実践演習の中で模擬授業を重視している。それは、教育実習で行った授業の反省を踏まえての授業づくりを検討する時間を設けることが有効であると考えたためである。2014年度の受講生は14名で全員が50分間の模擬授業を行うことは難しく、短縮した形で模擬授業を行った。2015年度は10名の受講生が50分間の模擬授業を行い、その後じっくりと授業の検討することができた。もちろん、授業計画を工夫することで50分間の模擬授業をせずとも、授業づくりや指導法の検討はできるだろうが、できることならば、受講者全員にしっかりとしたフィードバックの時間を設定したい。ただし、数が少なければいいという単純な話ではなく、数が少ないとどうしても受講生同士のコメントが限られてしまい、ディスカッションが深まらないということもある。この点は教職実践演習の授業担当者が工夫を求められる。

次に、専門のバランスである。2015年度の授業で特に印象的だったのが、文系と理系が教職や授業についてディスカッションできたことを高く評価している受講生の声が多かったことである。教職課程の授業でこれまでも他学部の受講生と共に学んできたはずであるが、「この４年間で初めて文系と理系で授業に対してのディスカッションを行って、違う考え方を教えてもらうことができておもしろかった」（理学部学生）、「これまで学科の教職学生としか、教職について議論をしたり、授業のコメントをし合ったりしたことがなかった。しかし、教職実践演習の講義を通じて、様々な学部の学生、特に理

系学部の学生と交流する機会を得ることができた」（人文学部学生）といった声が１枚ポートフォリオに記載されていた。教員免許状の科目が文系科目だろうと理系科目であろうと、教壇に立ったときには、文系的な考え方がなじむ子ども、理系的な考え方がなじむ子どもの双方に教えなくてはならない。その現実を改めて認識し、自分とは異なる領域の受講生から模擬授業のコメントを得たことを高く評価しているようであった。時間割の関係や学部によっての教職履修者の数の相違により難しいとは思われるが、このようなメリットを踏まえた上で、履修者の専門が偏ることなく、バランスがとれるような履修登録の仕組みを構築していく必要があるだろう。

○事例Ⅰ：

●授業構成

① イントロダクション（教職実践演習の趣旨、到達目標、演習の進め方についての説明）
② 履修カルテなどによる教職課程における学修の振り返りと課題
③ 学校が直面する実践的･臨床的課題についての整理、中高生理解、教育実習の体験などを踏まえての討論
④ 課題テーマの設定、課題研究のグループ分け、役割分担と作業計画の協議
⑤ 実践事例研究、ロールプレイング、模擬授業、実践記録等作成の方法についての解説
⑥ 課題テーマに関する実践事例研究（教科指導）の発表、場面指導でのロールプレイング実践と討論
⑦ 課題テーマに関する実践事例研究（生徒指導）の発表、場面指導でのロールプレイング実践と討論
⑧ 課題テーマに関する実践事例研究（学級経営）の発表、場面指導でのロールプレイング実践と討論
⑨ 課題テーマに関する実践事例研究（道徳指導）の発表、場面指導でのロールプレイング実践と討論
⑩ 学習指導案（教科指導）に基づく模擬授業と検討
⑪ 学習指導案（生徒指導）に基づく模擬授業と検討
⑫ 学習指導案（学級指導）に基づく模擬授業と検討
⑬ 学習指導案（道徳指導）に基づく模擬授業と検討
⑭ ロールプレイングや事例研究、模擬授業の振り返りと教員として求められる４つの事項の再確認
⑮ 教員としての資質能力の確認、まとめ

●ロールプレイングで教育実習の体験などから作成した場面指導の記録(プロセスレコード)を活用した試み

プロセスレコードでは、場面に立ち会う当事者の相互作用の過程を①相手の言動（発した言葉・表情・仕草など）②自分が感じたり考えたこと　③自分の言動（発した言葉、声の調子、実際の行動など）④分析・考察に分けて記載する。その際、特に観察可能な「事実」とそれに伴う「感情・思考」、状況解釈に基づく「判断」とを区分して記述するよう留意する。

プロセスレコード

記入日年月日　平成 27 年 9 月 10 日

生徒の情報	２学年　男・女　　学校名　○○中学校		
この場面を取り上げた理由 実習初めに生徒への対応の仕方の難しさを痛感し指示の仕方を具体的に考えさせられたから			
生徒の言動	私が感じたり、考えたりしたこと	私の言動	分析・考察
①水泳の時間に、先生の話を聞かずに友達同士でふざける。	②ちゃんと話を聞いている生徒に迷惑だなあ。指示が通らないな。	③そのまま指示を出す。	
④次にすることがわからず指示と違ったことをしてしまう。	⑤どうしたら指示が通るだろうか。	⑥「先生の話を聞くよー」と大きな声で呼びかける。	⑦注意、指示の出し方が弱い、優しすぎる。
⑧周りにふざけている生徒がいたのでふざけていなかった生徒もふざけはじめる。	⑨指示の出し方、立ち位置はどうしたらいいのだろう。	⑩笛を使って指示を出す。全員の真ん中で指示を出す。	⑪学習の流れを全員が把握できるように事前に十分説明しておくべきであった。
私がこの場面から学んだこと 実習生であっても生徒の前に立って授業するときには指導者の立場であった。しかし、どうやって指示したらいいかわからず結局もたつくことになってしまった。もっと臨機応変に的確な指示ができるようにならなくてはいけない。			

多くのプロセスレコードで記入されていたのは、指導言の中でも上記の例のように指示に関連した困難な事態に直面した事例である。演習では、このプロセスレコードを使って次のようにすすめた。

①各グループでプロセスレコードを持ち寄りその中から時間の制約上各グループで重複がないように適切なものを一つ選ぶ。②記載されている場面をロールプレイングによって再現する。③状況ごとに演技者がお互い何をどのように感じ考えたかを発表する。④全員でなおどのようなことが考えられるかなど質疑応答によって話し合う。⑤最後にプロセスレコードを作成した受講生へアドバイスするという形でまとめをする。

●学生のコメントと課題

想像上の創作の場面設定ではなく実際に起こった事態を扱うことになっているので切実感をもって考えることができたとの感想が多かった。またプロセスレコードという記録に基づいて実施されているので場面の状況の事実が必ずしも十分記述されているとは言えないにしても場面の具体的な状況を踏まえた上での検討が行えたのではないかとの指摘もあり、準備に相当時間がかかったとの感想もあったが、概ねねらい通りの受け止め方がなされていたようである。

上記のプロセスレコードを使った演習で指摘された点をいくつか以下に紹介する。

③について、一旦静になるまで説明をやめてみたらよかったのではないか。最初に強く言っておく必要があったのではないか。④⑪について、授業はじめに本時学習する内容について生徒全員に確実におさえさせる。伝わったかどうかの確認も欠かせない。⑤について、指示が届く環境をまず用意する。⑥について、「指示を出すときには笛を吹くので注目してください」といったクラス内の共通の決まり事を決めておくとよかったのではないか。⑧について、ふざけている人にはしっかり注意する。プールの中では生徒は興奮して普段通り指示が通らないため笛を使用するなど全員を注目させてから指示を出す必要があった。⑨⑩について、指示の仕方としては、指示内容や指示の言葉はいうに及ばず、指示を出す立ち位置、タイミング、声の大きさ、笛の使用や拍手など生徒に注目させるための様々な工夫が必要である。

さらに、指示に関わる状況場面の違う個別的な事例をいくつか検討する中で、指示に関して一定のセオリーのようなものが見いだせるのではないかとか、そもそも生徒は教師の立ち居振る舞い全体をみて「この先生はゆるい」といったような受け止め方をするとふざけたり指示を聞かなくなったりする傾向があるので、けじめのある指導者として振る舞うなど教師としてのしっかりした姿勢が重要であるのではないか、といったより一般化して考えていこうとする発想も出た。この場面学習は次に続く発展的な学習につながっていく契機になったようである。

指導言の一つである指示については多くの実践上の積み重ねがあり、例えば「指示の原則」と称されているような蓄積がある。一時一事、個別評定、全員、細分化、趣意説明、簡明、確認、激励の原則などである。このような蓄積された成果と結びつけて学習させるのでなければ演習は単に個別的なその場限りでのパフォーマンスを追求することのみで終わってしまうことになりかねない。

○事例J：

●授業構成

受講生は７名（経済学部１名、人文学部３名、理学部３名）であった。初回のガイダンスでは、学びあう関係づくりを意識した活動を行った。Ａ４版の自己紹介ワークシートに、「呼ばれたい名前とその由来」、「私が今、ワクワクしていること」「私が今、気になっていること」「最近、いらいらしたり、腹立たしかったこと」、「私が大切にしている価値観のうち一つ」「私がこれまでに成し遂げたことの中で、とくに誇りに思うこと」、「この演習で期待していること」を記入してもらい発表しあった。次に、「学校あるある」と題した活動を行った。学校と教師についてそれぞれの学校経験をふりかえりつつ、共有しあった。最後に、なぜ、こうしたことに時間をかけたのかについて、「勉強から学びへ」（佐藤学）という観点から説明した。

勉強と学びの違いは、出会いと対話の有無にあるという。「学び」とは、モノ（対象世界）との出会いと対話による＜世界づくり＞と、他者との出会いと対話による＜仲間づくり＞と、自分自身との出会いによる＜自分づくり＞とが三位一体となって遂行される「意味と関係の編み直しの永続的な過程」である（佐藤学『学びからの逃走』、岩波ブックレット、2000年）。受講生には、将来、こうした「学び」を授業に組み込んでほしい。そのためにも、まずは、自分自身がその魅力と必要性をこの演習で体感してほしいと述べた。

第２回～第５回にかけては、学校の授業を「勉強から学びへ」と転換するために必要な視座や理論についての学習を行った（表J-1）。これらの学習内容をＡ３用紙・片面１枚に体系づけてまとめる課題（学びのノート）を課し、第６回の講義では、お互いの「学びノート」に対してコメントする交流会を開催した。また、この日の講義後半には、夜間中学校教諭の見城慶和の授業実践の映像記録を視聴し、議論した（映画『こんばんは』森康行監督）。

第７回～９回にかけては、授業づくりのワークショップを行った。文系科目と理系科目の２班に分けて、模擬授業にむけた教科と単元の選定、授業構成について話しあい、教材づくり、指導案作成の一連の作業を協同で行

なった。

第10 ～ 11回は、場面指導ワークショップを行った。模擬授業を行った班メンバーで、「日頃の授業のなかで児童・生徒は間違えることがあります。あなたは児童・生徒の間違い発言に対してどのような対応をとりますか。声の小さな児童・生徒への対応にもふれなさい」といった問意に対する想定問答を作成し、代表者が模擬面接形式で回答した。

第12 ～ 13回は、授業参観レポートを持ち寄り、１人のレポートにつき30分程度の時間をとって検討した。第14 ～ 15回は、これまでの演習全体のふりかえり、理想の教師をテーマとしたマインドマップを作成し、披露しあった。

表 J-1　座学で使用した教材一覧

著者	出典
佐藤学・浜崎美保・和井田節子・草川剛人編著	『活動的で協同的な学びへ「学びの共同体」の実践　学びがひらく！高校の授業』明治図書、2015年 第１章、第２章の一部抜粋
和田喜代美	『学びの心理学―授業をデザインする』左右社、2012年第１章「学びのシステムとしての授業」 第８章「教師の生涯発達と授業づくり」
佐藤学	『教師花伝書―専門家として成長するために』、小学館、2009年 「教師の居方について」「子どもの声を聴くこと」、「技の伝承と学び」

●特色ある取組

①　学びのノートの作成と交流会

「学びのノート」とは、これまでの学習内容を自ら体系化していくための学習方法として筆者がよく用いるものである。白紙のＡ３版のコピー用紙を配布し、自宅で完成させてくることを求める。作成する際の留意点として、１年後の自分が読んだとき、当時学んだこと（講義内容、自分の変化や気づきなど）が思い出されて、情報にアクセスできるものをめざすように伝えておく。

演習時間には、お互いの「学びのノート」を披露しあう。これは、他者のまとめ方にふれることで、集団的で質を高めあうことを意図している。受講生は、10分かけて、ノートを読み込み、裏面にコメントを寄せる。コメントする際には、相手を励まし、次の学習へと背中を押すようなことばを選んで書くように指示している。学生のコメントを紹介する。

学びという項目に絞って、深く探究していてとても見やすく読みやすかったです。学びについて自分のイメージやディベートの内容も含めながら振り返ることができました。もっと視覚的に楽しめるようにすると、もっと入ってくるノートになると思います!!

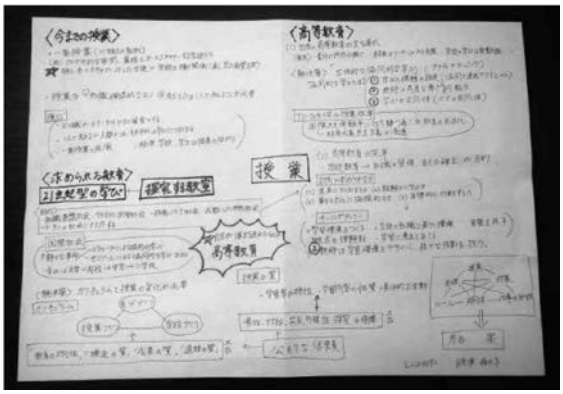


写真 J-1　学びのノート

②　模擬授業グループワーク

単元全体の授業計画、模擬授業の指導案、模擬授業で使用する資料や教材の３つをグループで作成するように指示した。その際、これまでの学習内容（活動的で協同的な学び、授業の質を高める手立てなど）をふまえて、学習空間づくりへの配慮や教師の働きかけも議論するように求めた。理系チームは、中学理科「メンデルの法則」を、文系チームは中学社会科「日本文化の多様性」を選択した。模擬授業20分と意見交換20分を１セットで行った。

自分が良いと思っているところでも、他人から見ると違うということが改めてわかってよかった。また、他教科の授業を見ることができ、そのような仕方があるのかということを知れた。今日、皆から言われたことを改善できるように、日々を過ごしていきたい。

③　場面指導グループワーク

『教職課程』2015年４月臨時創刊号の場面指導の特集号を参考にした。まず、面接の心構えを全員で確認した後、２班に分かれてグループワークに入った。出題テーマは、教員側が用意したものに加えて、学生からもテーマ群から選んでもらった（表J-2）。１問につき20分の準備時間を設けて、代表がイスに座り、残りのチームは教員と共に面接官役を担う。

ひとりひとりの意見が聞けてとても面白かった。自分では気づくことができなかったユニークな視点もあって勉強になった。意見がたくさん出たが、それをまとめたり議論する前に時間切れになってしまった。自分の理解度が足りていなかった点は、次回までにはどうにかしたい。

表J-2　場面指導ワークショップの問題例

テーマ	質問文
名前の呼び方	学級担任としての最初の仕事は、子どもの名前を呼ぶことです。名前の呼び方はどのようにすればよいですか。ルールはありますか。
言葉遣い	あなたは、学級の子どもたちの言葉遣いが悪いことをどのように考えていますか。言葉遣いの指導をどのようにしますか。
けんか	子ども同士のけんかについて、どのような対応が原則となりますか。トラブル回避に向けての対応についても考えてください。

④　研究授業参観と報告レポートの読みあい

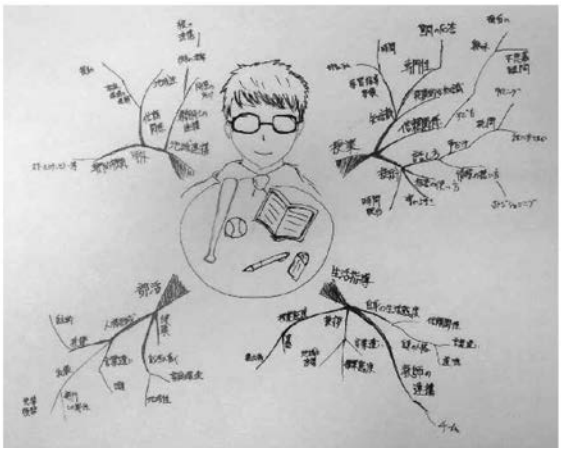
福岡市教育委員会による研究授業公開日を活用させていただき、授業参観と報告レポートを課した。受講生には、演習の学習内容をふまえて授業を参観し、講演会、全大会、分科会も含めて終日参加することを求めた。参加後の報告レポートは、3,000字以上で、授業者の工夫や巧みさを中心に、自分自身の教育実習での授業をふりかえりながら書くように指示した。

報告レポートは、２回に分けて読みあい、意見交換を行った。

⑤　マインドマップの作成と決意表明

マインドマップとは、トニー・ブザンが提唱した思考・発想法で、思考を整理し、発想を豊かにし、記憶力を高める効果があるという。表現したい概念の中心となるキーワードやイメージを中央に置き、そこから放射状にキーワードやイメージを広げ、つなげていく。

演習の最終版で、「理想の教師像」をテーマにマインドマップを作成し、それをもとに決意表明を行った（写真J-2）。演習での学びをふりかえりつつ、理想の教師像になるための知識や技能や資質・条件を可視化していく。かつ、それを仲間への意見表明の資料にすることで、演習終了後の学習の動機づけをねらった。



写真J-2　受講生による作成例

●とくに良かったと感じられたもの

一つには、対話的な学習空間の必要性を理解し、具現化できた点である。演習冒頭で、「勉強から学び」へのシフトチェンジの学び、受講生自らがそれを具現化した経験は、大きな財産になろう。

もう一つには、学習における省察の必要性とその手法のヴァリエーションを示せたことである。ややもすると、「省察慣れ」している学生たちに、深度のある省察を促すヒントを多少なりとも与えることができたのではないかと思う。

●教職実践演習の課題

現行体制では、コミュニケーション力やモチベーション、教職の知識や技能に大きな差があり、かつ免許種も希望校種も異なる学生たちが集う。多様性をうまく活かす演習づくりを心掛けてはいるが、それにも限界があるように思う。

○事例K：

本演習の目的は、第一は生徒、保護者、同僚とのコミュニケーションを円滑にできること、第二はわかりやすい授業の進め方、第三は教育現場で知っておくと役立つことの３点である。

１．コミュニケーションスキル

１）効果的な自己紹介とは

自己紹介の内容の検討にはじまり、視線、表情、話の速さなどの要素をチェックしながら一人ひとり実際に自己紹介をする。

２）コミュニケーションに必要なスキルとは

受信技能、処理技能、送信技能の説明を行い、これらは教師として最も重要で、教師自身のメンタルケアにも不可欠であることを説明する。

受信技能は、生徒の理解に役立つだけでなく、保

護者との意思疎通もしやすくなり、教師のストレスが軽減する。

処理技能は、さまざまな問題の解決の基本となり、出来事に振り回されずに教員生活を送れる。

送信技能は、自分の考え、気持ちを相手に伝えるスキルでこれも受信技能と同じく、生徒、保護者とよい関係を築きやすくなる。表K-1の項目が重要ポイントである。

表K-1　よいコミュニケーション

1．視線をあわせる
2．手を使って表現する
3．身を乗り出して話をする
4．はっきりと聞こえる声で
5．明るい表情
6．話の内容が適切

3）コミュニケーションスキルを高めるには

Social skills training（SST）が役立つ。SSTの進め方（表K-2）は、もっとも効果的とされる技法で構成されている。この流れにそって一人ひとりが教育実習での場面を取り上げてSSTを実施する。

表K-2　SSTの流れ

1．目標、練習することを決める
2．一回目の練習をする（ロールプレイ）
3．よかったところをほめる
4．さらによくなる点を考える
5．必要ならばお手本をみる
6．もう一度練習をする
7．よくなった点をほめる
8．練習したことを実生活で試してみる

2．わかりやすい授業ができるように

全員に教育実習で行った査定授業を再現してもらう。その際、指導をうけたことは何で、それをどのように工夫したかを明確にしながらすすめてもらい、最後に他の参加者全員からフィードバック（よかったところ、さらによくするために必要なこと）をする。この取り組みの狙いは、教育実習での体験を活かすことと他の人の授業の進め方から学ぶことである。

3．教育現場で生かせる知識

1）性的マイノリティーについて

教師が性的違和をもつ生徒を理解できるようになるためには、どういう気持ちなのか、実際にどうしてほしいと望んでいるのか、社会は今どういう動きを示しているのかについての理解を深めることである。DVD、パワーポイントを使って実際の支援者から説明してもらう。

2）アドラー心理学について

アドラー心理学とはアルフレッド・アドラーによって体系づけられた心理学である。人間の行動にはすべて目的があり、原因ではなく目的を追求することに重点を置いており、人の行動の多くはマイナスの感情からプラスの感情へ、劣等から優越へ移行する目標をもっていて、自分のマイナスの面を補償するにはどのような手段を使い、どのようなプラスの面を目指すかを考えることが大切であるとしている。教育分野では教育相談、生徒指導、クラスの運営などにこの考えが活用されており、教師の考え方の支柱となることが期待できる。

簡単にアドラー心理学について説明した後、各自の行動パターンを把握し、どういう自分になりたいかを意識するためにライフスタイル診断を実施する。これによって自分自身への理解を深め、将来目指す行動パターンが明確になる。4つの行動パターンとは、Aタイプ：安楽でいたい、Bタイプ：好かれたい、Cタイプ：リーダーでいたい、Dタイプ：優秀でありたいである。

○事例L：

●平成27年度の全15回の授業構成について

第1回目～3回目は、①シラバス内容の再確認、②教職履修カルテを活用した振り返り、③本授業への動機を高める回と位置づけ、次のようなことを行った。

まずシラバスの内容をあらためて確認し、授業の目標（教職課程総仕上げの位置づけにある授業であること）を伝えた。教職履修カルテについては、個別に確認・指導を行った。教職履修カルテ（印刷物）をもとに、これまでの教職課程での学びを一人ひとり確認しながら、学習の振り返りと課題について整理した。こうした授業の後で、模擬授業やロールプレイの準備へと入った。

最初に行ったのは、「テーマ設定」である。このテーマ設定にあたっては、過去の取り組み例を紹介し、受講生のイメージ作りをサポートしながら進めた。この段階は、受講生が最も苦労していたように思われる。受講生は皆、教育実習で自身の教科科目に関する学習指導案作成の経験はあったが、今回のような趣旨の授業を行うことは初めてであったため、授業の目標をどこに置くか、導入の工夫をどうするか、授業をどのように展開するか、対象者の発達段階を意識してどのような工夫を凝らすのかなど、相当な準備が必要だったようである。作成された資料等は事前にチェックし、個別指導と相談を繰り返しながらサポートした。

第４回目以降は、一人ひとり模擬授業等を行った。教師役以外は皆、児童・生徒役になり、教師役が作成した指導案に則り授業を受けた。授業後は、毎回チェックリストを活用して、授業について相互チェックを行った。チェックリストは、導入、板書、発問、対応、評価、時間、態度・姿勢、その他感想といった柱からなる。記入後は、授業担当者及び受講生全体でチェックリストの内容も踏まえながら、「よかった点」・「こうすると更によくなると思われる点」について、シェアリングを行った。演習担当者は、それらを踏まえて総括した。

第14・15回の授業は、授業全体での学びをまとめ、総合的なディスカッションを行った。当初各自が立てた課題について到達度を確認したり、残された課題についてまとめ、皆で共有した。また、昨今の教育現場をめぐるニュースについても触れながら、これからの教師に求められる力について、全員で意見交換した。振り返りの後は、レポート提出をもってまとめとした。

●過去３年間を振り返ったなかでの特色ある取組について

ここでは、「不登校生徒宅への家庭訪問」を扱ったロールプレイについて紹介する。

テーマ設定に関する相談の段階で、当該学生は教職課程で学んできた授業の中で「不登校の理解と支援」について関心がある、と伝えてきた。この授業でロールプレイを行うことで、これまで学んできた不登校の理解について内容を深化させ、教師としてのコミュニケーションスキルを試したいとのことであった。

授業準備として、本人はロールプレイ用の台本をＡ４版、10枚程度作成した。こうした準備の上で、ロールプレイに臨んだ。ロールプレイの登場人物は、教師、母親、不登校の女子中学生の３名であった。場面設定は、教師が不登校の女子中学生の自宅を訪問し、家族面接を行うというものであった。ロールプレイでは、自宅を訪問する場面から、家庭訪問を終えるまでを一通り演じた。ロールプレイには、目的に応じて様々なアレンジがあると思われるが、今回のロールプレイは、即興劇的なものも若干含まれていた。具体的には、演者は台本を事前に一通り読んではいたが、役割を演じる中で、台本を読んでいた時にはあまり意識しなかった「今、ここで、感じたこと」を重視し、アドリブも交えながら進めた。授業後は全体でシェアリングを行い、まず演者（生徒役の人、母親役の人、教師役兼台本作成者の人）の感想、その後でフロア全体の感想へと展開した。

●この授業において特に良かったと感じられたこと

第一に、「入念な準備」である。今回当該学生が取り組んだロールプレイは、30分の設定であった。台本作成には、かなりの時間を要していた。場面設定、事例の背景、それらに基づく台本づくりに、授業以外の時間もかなり使い、周到な準備を行っていた。また、４年間の授業内容を復習したり（特にコミュニケーションスキル）、教育実習で接した生徒たちの様子も思い出しながら、何度も台本を書き換えていた。そこには今回のロールプレイを、よりよいものにしようとする授業への積極的な姿勢と努力が感じられた。この点は他の受講生にもよく伝わっており、全体でのシェアリングでも皆が高い評価をつけていた。

第二に、このように台本の準備は十分に行うが、一方で「ロールプレイの最中は、演者がその場で感じたことを尊重して、やりとりの流れによってはセリフや言い回しを変えたり、アドリブを加えてロールプレイを展開していたこと」である。このことにより、ロールプレイが臨場感あるものとしてフロアに伝わっていたように思われる。この「今、ここで、起こっていること」を受け止め、大事にし、そこから更に展開するという感覚は、教育現場でも重要な要素ではないかと考える。授業の事前準備はしっかりと行うが、実際に授業が始まり想定外のことが起こったとしても、本質はかえないで柔軟性をもちながら授業を行うという姿勢を授業の中で体験することが出来たのは、貴重な経験だったのではないかと考える。

第三に、「多様な観点からのフィードバック・振り返り」である。受講生全体でのシェアリングでは、「自分が当該生徒だったら」や「台詞の背景への質問」など、多様な観点から感想や意見交換がなされた。これらの視点には、総合大学ならではの良さが活かされていたように思われる。本演習は、毎年様々な学部・学科の学生が受講している。質問や感想にも、受講生の学部・学科のバックグラウンドが反映されていたように感じる。総合大学ならではの、多様な振り返りが出来ることは、貴重であると思われた。

●教職実践演習の課題について

これまで行ってきた中では、開講に関する課題を大きく意識することはあまりなかった。一方で授業担当者として、自身の課題を意識することは多々あった。

その中からここでは、「学生が「考えること」を更に展開するコメント力」を挙げる。受講生からは「自身の教科授業と違って、教科書のない、ある意味『答えのない授業』を行うのは難しかった」「授業の落としどころが抽象的になってしまい、一般論というか、○○すべきという論調というか、自分のことばで語れていなくて、具体性に欠けていた」という感想が聞かれることがままあった。学生は自身が掲げるテーマについて、「自分はどう考えるのか」「それを児童・生徒に、自分のことばでどのように伝えるのか」にとても苦労していたような印象を受ける。これについては、学生が事前の準備を行う段階で、それらについて考えるためのアイディアや情報を提供したり、適宜個別に相談にのったりはしたが、

限られた時間で、適切なサポートが出来たかどうかについては、甚だ心もとない。学生が「“自分は”このテーマ（例えば、いじめ）について、どう考えるのか」を更に展開するためのコメント力をつけるには、筆者自身の授業力を高める必要があると感じている。

○事例M：

●授業構成

第１回　イントロダクション(授業の到達目標の確認、演習の進め方の説明)。

この演習では２つの選択分野である模擬授業と実践的研究発表のうち１つを選択することになるので、どちらかにするか各自で検討する。

第２回　受講生のアイスブレーキング（履修カルテの確認、教職課程における学修の振り返りと討論)。選択分野の検討。

第３回　教育実習の体験発表､意見交換と課題の確認。選択分野の検討と決定。

第４回　分野とテーマごとにグループ分け、諸資料収集、役割分担の協議と見通しの確認。

第５回　具体的な授業内容、発表内容の検討と確認。

第６回　授業内容、発表内容の最終準備と確認。

第７回　学活の模擬授業(1)(2)（以下のカッコの数字は担当者別による内容・回数を示すものである。したがって、その都度内容は異なる）

第８回　道徳の模擬授業(1)(2)

第９回　道徳の模擬授業(3)(4)

第10回　道徳の模擬授業(5)(6)

第11回　道徳教育の実践的研究(1)(2)

第12回　宗教教育の実践的研究(1)(2)

第13回　生徒指導の実践的研究(1)(2)

第14回　生徒指導の実践的研究(3)(4)

第15回　本演習を終わっての反省と討議。教員としての課題の確認。

●特色ある取り組み

＜道徳の模擬授業：手品師＞

これまで一般教師に評価の高かった「手品師」の資料を用いたある学生の模擬授業では、誠実さについて様々な考え方が示され、本教材のさらに深い意義が明らかになった。それは、「手品師の誠実さや責任感」を示すものとしての一般的な教材観を超えて、友人、男の子、自分自身、そして観衆への誠実といった視点から本教材を問い直すものであり、そうした点でさらに興味深い教材であることを明らかにしていた。こうした視点は松下良平『道徳教育はホントに道徳的か？』の視点とも重なるもので、道徳の授業を考えるよい授業であった。

＜宗教教育の実践的研究：仏教とは何か＞

橋爪大三郎『世界がわかる宗教社会学入門』を中心テキストとしたある学生の実践的研究発表は、テキストにある知識とともに仏陀や浄土真宗について中高校生にもわかりやすく説明するものであり、宗教を考える良い機会となった。今後の宗教教育に関する授業の参考になるものであった。

＜生徒指導の実践的研究：葬式ごっこ事件など＞

資料『「良心」の教育神話』より、いわゆる「葬式ごっこ」事件の被害者の状況や教師たちの取り組みを中心に学生たちが時系列に研究発表を行った。また、同資料から大阪の河内長野中学における校内暴力の状況を時系列に発表することによって、その凄まじい状況を具体的に認識し教師としての実践的な問題点を明らかにした。これらは、組織的な指導を含めて長年の日本の学校における生徒指導の課題を明示するものであり、今後の実践を考えるよい機会となった。

●良かったと感じられたもの

道徳の模擬授業では、30分程度の時間的制約のなか(一時限で発表者２名のため)、読解の時間を省略しながら特に展開の部分を中心に模擬授業を行ったものが全体的な流れが把握できてより実践的で効果的だった。メリハリのない道徳の授業になる場合もあったが、そうした場合でさえもそれぞれの授業者の個性ははっきりしており、熱意の感じられる実践も少なくなかった。特に熱意や優れた個性、視点の感じられる実践ではそのことをはっきり指摘し成長を期待した。

宗教教育の実践的研究は、これまでの日本では宗教教育が諸外国と比べると全くといってよいほどなされてはいなかったことが背景にあり、特に興味のある学生のために設けている。近年の宗教的な対立や犯罪の理解のためにも、宗派教育ではない知識教育を含んだ情操教育は不可欠であり今後の課題でもある。資料のひとつである橋爪大三郎『世界がわかる宗教社会学入門』などの知識教育は今後の教育にも不可欠であり、興味深く読み込んでいる学生も少なくない。ある寺院の子女である学生は仏教についての基本的知識と信仰について発表し、他の学生からも好評だった。

生徒指導の実践的研究では、特に戦後の生徒指導上の大小の事件をとりあげた資料をもとに、学校教師たちがどのような実践を行いどこで躓き、どのような結果に至ったのかを研究発表している。資料には歴史的で身近などこかで聞いたことがある事件が多いだけに、歴史的な時代の問題としてこれまでより深く具体的に理解できており、実践的な力量にも深く関わる発表であった。

●教職実践演習の課題

・より実践に役立てるような演習を考えてはいるが、

実際の生徒がいない中ではやはり臨場感や緊張感が欠ける部分がある。

・教職への問題意識が低い学生もおり、個人差が大きい。

○事例N：教科・保育内容等の指導力向上を目指したビデオ・聴衆フィードバックを伴う模擬授業

【問題】

教職実践演習は、「学びの軌跡の集大成」として最終年次に実施される、教職課程の演習科目である。すなわち、「教職課程の他の授業科目の履修や教職課程外での様々な活動を通じて、学生が身に付けた資質能力が、教員として最小限必要な資質能力として有機的に統合され、形成されたかについて、課程認定大学が自らの養成する教員像や到達目標等に照らして最終的に確認するもの」である。平成18年７月の中央教育審議会答申に基づく科目であり、その趣旨・ねらいとして、使命感や責任感、教育的愛情等に関する事項、社会性や対人関係能力に関する事項、幼児児童生徒理解や学級経営等に関する事項、教科・保育内容等の指導力に関する事項を含めることが適当とされる（文部科学省、2006）。

ここでは特に、教科・保育内容等の指導力の向上を促す指導方法について検討したい。授業内容例としては、「模擬授業の実施を通じて、教員としての表現力や授業力、子どもの反応を活かした授業づくり、皆で協力して取り組む姿勢を育む指導法等を身に付けているか」の確認が示されている（文部科学省、2006）。教職実践演習の参加者は、教育実習等を終えた学生である。この科目で模擬授業を促す意義は、教育実習等で明らかとなった個人的な課題を踏まえつつ、指導力の再確認を行い、その改善を図る点にあると考えられる。

教育実習等の個人的な課題は、その後の学生の指導力にも影響することが知られている。例えば、教育実習生は、学習指導の見通しがもてない自己に一番の不安を感じる（清水ら、2011）。実習後には、学校現場への不安が和らぎ、教師としての自己効力感が高まるものの（大野木・宮川、1996; 持留・有馬、1999）、教育実習生の対人不安が強い場合には、授業の実践力や児童・生徒との関係に対する不安が高く保たれるようである（大野木・宮川、1996）。そして、新規採用後の教員調査では、授業実践力や児童･生徒関係の不安が高い教員は、比較的、教師としての自己効力感が低いことが判明している（西松、2005）。対人不安は、日本の学生に強く認められる特徴であり（金、2005）、指導力の向上を妨げる可能性がある。

したがって、教職実践演習によって学生の指導力を高めるためには､学習指導のスキルを再確認すると同時に、対人不安の改善を促すことが有効であるかもしれない。これらに対処できる指導方法には、ビデオ・聴衆フィードバックがある。この技法は､対人的課題（例えばスピーチ）に挑戦する人の行動を録画し、本人にビデオを提示した上で、肯定的なコメントを返す方法である。もともとは、社交不安障害に適用された、認知行動療法の一技法であるが、学生の主観的パフォーマンス（社会的スキル）や対人不安（社会不安）の改善にも効果が検証されている（Chen *et al.,* 2015）。本稿では、学生の指導力向上を目指し、通常の模擬授業に、ビデオ・聴衆フィードバックを応用した例について紹介する。

【方法】

参加者　大学４年生５名である。福岡大学の平成27年度の教職実践演習（全15コマ）を選択した学生を対象とした。全員が中学校教諭一種免許状の取得予定者であった。

模擬授業のルール　模擬授業の導入に際し、教師役は服装を整えること、生徒役は子どもになりきること、グループ討議では肯定的な発言をすることを定めた。

装置　三脚付きビデオカメラとノートPCを使用した。模擬授業の際は、教師役や生徒役の振る舞いや発言が明瞭に記録できるように、教室後方にビデオカメラを設置した。ビデオ・聴衆フィードバックの際には、動画データを転送したPCで、模擬授業の様子を視聴した。

手続き　模擬授業の前段階として、学期はじめには、教職履修カルテの確認や教育実習の振り返り、個人的課題についてのグループ討議等を行った。模擬授業は、その後、以下の構造で、AとBを順番に繰り返す形式で導入した：

A. 本日の予定と宿題の確認１（30分）― 模擬授業（50分）― まとめ（10分）

B. 本日の予定と宿題の確認２（30分）― ビデオ・聴衆フィードバック（60分）

参加者の学生には、以下の段取りで、指導を行った。まず、宿題として学習指導案（学習目標や評価、授業の構造等）の作成を課した。参加者が共有できる科目として、中学校における総合的学習、もしくは、学級活動を想定させた。宿題の確認は、２回にわけて行い、教育実習等での課題を踏まえつつ、グループ討議と担当教員の講評を行った。模擬授業では、入室から退室まで、教育実習の状況を再現させた。模擬授業の後には、教師役の学生に、ビデオの内容を詳しく想像させ、どのような姿が映っているかを考えさせた（認知的準備）。回を改めて、模擬授業の主要箇所は学生全員に視聴させた（ビデオフィードバック）。その間、教師役の学生の発言を促し、必要に応じて、担当教員が表

現力等の指導を行った。その後、担当教員と生徒役の学生が、肯定的な意見や感想を伝えた（聴衆フィードバック）。まとめとして、視聴前の予想と比べて考えが変化したかどうか、模擬授業で何を学んだかについて、教師役の学生に意見を述べさせた（認知的再体制化）。

【結果と考察】

教職実践演習の模擬授業に、ビデオ・聴衆フィードバックを応用した結果、まず、学力指導のスキルを再確認することができた。指導力を高めるために、基本的事項や表現力、臨機応変で的確な対応、主体的な教材研究といった点（文部科学省、2006）について、評価と助言を行った。学習指導案や模擬授業（ビデオ）の指導を通じて、学習指導の見通しの不安（道徳の指導案の作り方がわからない、時間内に終えられるか心配、生徒の理解をどう確かめたらいいかわからない等）や、それ以外の個人的課題（方言が出てしまうのではないか、字が汚いのがコンプレックスだ、少人数で話すと緊張する等）が明確になった。こうした個人的課題については、宿題確認やビデオ視聴、聴衆フィードバックの際に対処し、その対応策について建設的に話し合うことができた。

また、対人不安を示す参加者には、改善の兆候が認められた。自らの指導場面をビデオで客観的に視聴したのは、どの参加者にとっても初めての経験であった。興味深いことに、ビデオフィードバックのやりとりでは、教師役の学生は、「とても緊張した」、「ここが悪かった」、「こうすれば良かった」というように、対人不安の感情や否定的思考を表明することが多かった。しかしながら、聴衆フィードバックに至り、生徒役の学生が「緊張は見えない」、「ここがよい」、「ここも参考になった」と伝えると、教師役の学生の反応が肯定的なものに変化した。客観的で、肯定的な行動観察によって、教師役の自己イメージが適切に修正されたものと推察できる。ビデオ・聴衆フィードバックは、フィードバックなしの条件やビデオフィードバックのみの条件よりも、主観的パフォーマンスや対人不安を有意に改善させる（Chen *et al.,* 2015）。学生の対人不安の改善を促す場合には、模擬授業のみ、あるいは、ビデオフィードバックを伴う模擬授業よりも、ビデオ・聴衆フィードバックを用いる模擬授業の方が望ましいと考えられた。

本稿の報告は、あくまで教職実践演習の一例に過ぎないが、ビデオ・聴衆フィードバックを伴う模擬授業の導入によって、学習指導のスキルや社会不安の改善の可能性が示唆された。学生の指導力向上には、個人的な特徴の把握と対処が重要と考えられる。参加者の学生は「新たな気づきがあった」、「やってよかった」、「心配や不安が少し減った」と述べていた。ただし、今回の試みによって、今後の課題も明らかとなった。まず、自らの模擬授業を欠席した学生がいた。当初から授業を休みがちであったが、怠学傾向によるものか、対人不安によるものかはわからない。教育実習を終えた学生が対象であっても、ビデオ・聴衆フィードバックの実施は、一律ではなく、参加者の心理的状態に応じて検討すべきかもしれない。また、この手続きには、通常の模擬授業以上の時間を要する。少人数での評判は高くても、参加者数が増える場合には工夫が必要となる。模擬授業の時間を短縮したり、ビデオフィードバックをオンライン化したり、参加者を限ったりする等、臨機応変な現場対応が求められる。さらに、ビデオ・聴衆フィードバックの有効性については、実証的な確認が望まれる。ランダム化比較研究が理想的であるが、通常の授業では、学習指導スキルや対人不安を標的とした認知・感情・行動指標を採用することができるだろう。

○事例O：

●平成27年度の全15回の授業構成

第１回　オリエンテーション～授業の概要と目的
第２回　教職課程・教育実習の振り返り～履修カルテを活用して①
第３回　教職課程・教育実習の振り返り～履修カルテを活用して②
第４回　教職課程・教育実習の振り返り～履修カルテを活用して③
第５回　教職課程・教育実習の振り返り～履修カルテを活用して④
第６回　教職課程・教育実習の振り返り～履修カルテを活用して⑤
第７回　模擬授業①
第８回　模擬授業②
第９回　ロールプレイング①～不登校への対応
第10回　ロールプレイング②～進路指導
第11回　ロールプレイング③～特別な配慮を必要とする生徒がいるクラス
第12回　ロールプレイング④～生徒指導
第13回　ロールプレイング⑤～生徒指導
第14回　ディスカッション①～教師の専門性について
第15回　ディスカッション②～学校・教師の意義について

●過去３年間を振りかえったなかでの特色ある取組の紹介

今年度の教職実践演習でとくに力を入れたのが、第９回から13回まで実施したロールプレイングである。

学生との事前相談を行って、各週のテーマならびに役割、状況の細かい設定を決めて、それぞれがその役割に

ついてしっかりと考える形で本番に臨む、という流れで授業に入った。授業当日は、メンバーがそれぞれの状況設定をそれぞれ説明したうえで、時間を区切ってロールプレイングに入り（だいたい30分程度）、その後、教員も交えての反省交流会を丁寧に行った。なお、授業の始めにおいて、説明する必要がない設定（たとえば、教師が通常掴むことができていない生徒側の事情や心情等について）はあえて説明しない形でロールプレイングを行った。

今年度のテーマは上記の通りであるが、より具体的には以下のものになる。

・第９回　不登校への対応

福岡県内中心部にある商業高校１年生の夏休み明けのHRを想定。女子生徒が８割程度を占めるクラス。夏休み明けから、数人の女子生徒が不登校気味になっている。その状態のなかで、担任教員（女性）がクラスづくりをもう一度やり直すことで、不登校の改善ならびに予防をしようとするという設定。

・第10回　進路指導

福岡県内にある工業高校３年生の４月に実施される進路指導を想定。今年から新しく３年生の担任になる教員が、特徴が異なる２人の生徒に対して一人ずつ進路指導をするという設定。１人目は、成績が良く、大学進学も就職も可能であるにもかかわらず、声優を目指して専門学校進学を目指す男子生徒という設定。２人目は学力は低いが、親の強い勧めで大学進学を目指すことになっているが、本人はそれほど意欲がない、という設定。

・第11回　特別な配慮を必要とする生徒がいるクラス

ADHDが疑われる生徒がいる中学１年生のクラスの５月を想定。当該生徒が目立ち始めているなかで、担任教員が保護者向けの説明会を開催するという設定。

・第12回　生徒指導

福岡市内普通科高校の高校２年生の７月段階で、一人の男子生徒が夜間徘徊で補導され、それに対しクラス担任が生徒指導を行うという設定。男子生徒は母子家庭で、母親が夜も仕事をしており、親に連絡が取れない状態での対応。

・第13回　生徒指導

学校に行く意味がわからないという中学２年生に対して、本人の本当の思いをまだ把握できていないクラス担任が生徒指導するという設定。

●上記の内容において特に良かったと感じられたもの

基本的な設定は共有しつつも、お互いの、とくに生徒側の状況がちゃんとよくわかっていない状態で、指導をしなければならないというロールプレイングは、現実の学校現場における指導の難しさを学ぶ契機となる。実際、ロールプレイングにあたって、教員役の学生はいくつかのプランをもって臨んでいたが、生徒役の学生の予期せぬ反応に対して、うまく対応できない場面も多々見られた。

こうした反省をふまえて、現実に即した指導のあり方や、生徒の把握の仕方を、メンバー全体で具体的かつ理論的に議論できたのは、とくに良かったと考える。

●教職実践演習の課題

担当した授業は登録者数が5人の少人数授業であったため、ロールプレイングや模擬授業、教職課程の振り返りなどもかなり密にすることができた。やはり教職実践演習を効果的にするためには、少人数での開催が必要だと考える。

○事例P：

●授業計画

① オリエンテーション①：「教育」と「教職」
② オリエンテーション②：プログラム内容と担当者決定
③ 私と学校教師：教職課程履修を動機づけたもの
④ 教職課程で学んだ教師像①：教科指導をめぐって
⑤ 教職課程で学んだ教師像②：生徒指導をめぐって
⑥ 教職課程で学んだ教師像③：学級担任業務をめぐって
⑦ 教職課程で学んだ教師像④：「職場」としての学校
⑧ 学校教育をめぐる今日的課題①：学力問題（学力保障）
⑨ 学校教育をめぐる今日的課題②：健康問題（体力保障）
⑩ 学校教育をめぐる今日的課題③：不登校問題
⑪ 学校教育をめぐる今日的課題④：いじめ問題
⑫ 学校教育をめぐる今日的課題⑤：メンタルヘルス教育（予防教育）
⑬ 学校教育をめぐる今日的課題⑥：保護者・地域社会との協働
⑭ 学校教育をめぐる今日的課題⑦：18歳選挙権の保証
⑮ 総　括

受講生：スポーツ科学部
４年生　GH　４名　教科「保健体育」
　　GS　８名　教科「保健体育」
人文学部
４年生　LG　１名　教科「英語」
　　LH　１名　教科「社会」

授業目標：「教育実習」を通し、自らの教職志望動機と学内での教職課程授業受講の整合性・妥当性を確認するとともに、あらためて学校教育職員に求められる専門性や役割、力量、スキル等について確認、自に問う。

授業内容・方法：今日の学校教員に求められる専門性や役割について、実習校での実践・体験・観察等をとおして学んだ内容（疑問・消化不良等も含む）を担当教員のコメント等も含めて共有、理解を深める。

授業方法：設定されたテーマを２名で担当し、自らの実習校体験を関係資料・文献等も参考にしながら発表し、他学生（受講生）の実習体験も加えながら、学校教員の役割･専門性･求められる力量等を協議・確認する。

●授業結果

目標達成：残念ながら、計画は空回り？　各学生の実習体験の貧困さを痛感させられた。担当教科の授業実習に追われ、「学校教師」としてのスタンスで学校を俯瞰する余裕(関心)がなかった？、動機の薄弱さ（免許取得であり教師志望ではない）？

レポート（発表）内容や資料づくり、プレゼン、ディスカッションも“本当に授業実習をしたのか？”と疑いたくなるような稚劣さ。結果的に担当教員による解説や注文が増えることとなり、ディスカッションも盛り上がらない。時期柄、就職活動や部活（対外試合等）で欠席者も多く､授業（演習）運営の工夫も反省を求められた。因みに本クラスにあって、教職採用試験受験者は２名、合格者０。

○事例Q：

●平成27年度の全15回の授業構成

第１回　　オリエンテーション
第２～５回　私が目指す教師像
第６～７回　公開授業参観
第８～11回　思考ツールを使って
第12～13回　模擬授業
第14～15回　模擬指導

●特色ある取り組み

全15回を通じて、「私が目指す教師像」「思考ツールを使って」「模擬授業」 については原則的にはグループ活動を行った。タイトルに従ってグループで話し合いまとめたものを紙面による報告とパソコン、模造紙を使って全体に発表するスタイルを取った。

○「私が目指す教師像」

事前に小学校、中学校、高等学校を通じて「好きだった先生」あるいは「尊敬できた先生」と「嫌いだった先生」あるいは「尊敬できなかった先生」はどんな先生だったかを思い出してメモしてくることを課した。授業ではそれらを付箋紙に書き、ＫＪ法で分類しまとめていった。各班（４班）ともに35分の時間を区切り、資料をもとに模造紙やパソコンを使って発表、討議を行った。

全部の班の発表が終わった段階で、「将来の私が目指す教師像」としてレポートを提出させた。班での話し合いや発表をもとに、学生は自分が教壇に立ち日常子どもに接する際の自分なりの教師像を具体的に思い描くことができた。その主なものとして「教科（学習）指導力があること」「人間性が豊かなこと」「コミュニケーション力」などがあげられる。

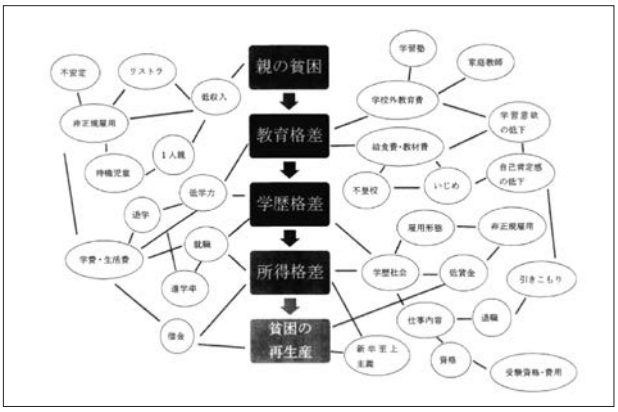
○公開授業参観

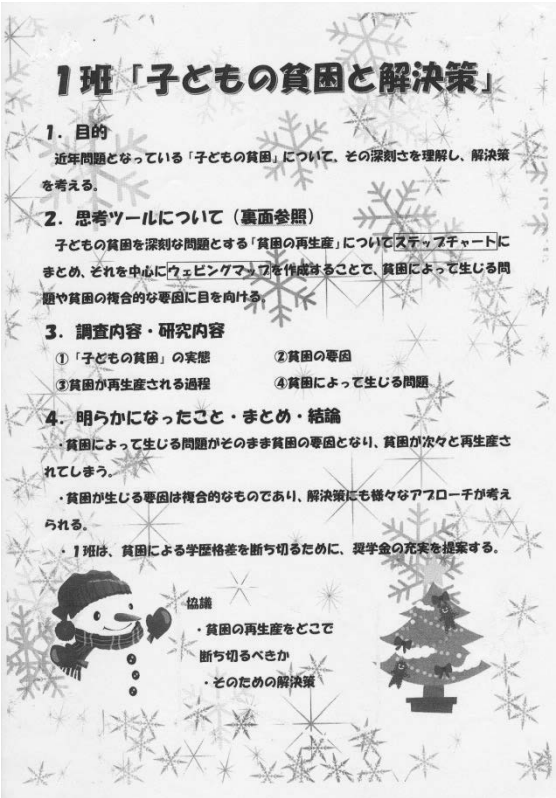
福岡市教育センターが行う「校内研究推進事業及び教育センター研究協力事業」の授業公開日（小・中・高を含む30校）を印刷し、そのいずれかに参加することを義務づけた。先生方が校内研究で指導案を練り上げ、近隣の小・中学校を含む全市に向けて授業を公開するものである。百聞は一見にしかず。講義等で話し合ったり、模擬授業をすることも勿論指導技術向上には役に立つものではあるが、学校現場で目の前で行われる指導や子どもたちの姿を自分の目で見､授業の後、研究テーマの考え方や授業の実際についての協議に参加し、参加された先生方のテーマや授業に対する質問や意見を聞くことによって、緊迫感や先生方の努力をつぶさに感じることができるものである。

○思考ツールを使って

「思考ツール」を使うことありきのグループ研究発表である。思考ツールやその使い方、実践例などが紹介されている「思考ツールの授業」（田村学・黒上晴夫　小学館）という本を配り、研究テーマは自由でグループ研究を行い発表し協議するというものである。いろいろな思考ツールを検討し、どの思考ツールが効果的かと論議することで、思考ツールの特徴を理解し教壇に立ったときに活用しようとする意欲を高めることができると考える。

具体的な研究テーマの例として「子どもの貧困と解決策」「なぜスマホが流行したのか」「工藤采配優勝のわけ」「東京ディズニーリゾートが長年愛され続けている理由」などがあり、グループでまとめている時や発表の時も楽しみながら学習を進めることができた。





○模擬授業・模擬指導

こちらからテーマを与え、模擬授業は、グループで指導案の略案を作り、４班とも代表者に10分間の導入を行わせた。模擬指導は、個人で考え希望者に模擬指導を行わせた。テーマの例としては次のようなものである。

模擬授業・高等学校の例

あなたは、高等学校の２年７組の担任をしています。 最近、携帯やスマートフォンなどにはまり込む子どもが多く、コミュニケーション力が低下してきているといわれます。そこで、あなたの学校でもコミュニケーション力を高めるため、携帯やスマートフォンの使い方について学級指導（50分間）をすることになりました。 その導入としての10分間の授業をしなさい。

模擬授業については､班で考えさせたこともあって、携帯などから情報を引き出しながら子どもの興味や関心を引く導入ができていた。

模擬指導については、個人で考え模擬指導をするものであったため、指導の希望者を募る場面では尻込みする学生が多かった。

●特によかったと感じられるもの

公開授業に参加した後のレポートより

学生Ａ：授業では、子どもたちの興味を引くような工夫や実感をともなった理解ができるための工夫がたくさんされていましたが、その目的や授業のねらいや一番大切にされていたものを説明して下さってとても勉強になりました。

学生Ｂ：話し合いの時間は30分から40分間でしたが、とても濃い論議をされていて、学生の話し合いではああはいかないので、大人として、社会人として、教師としての姿を見せられて感動しました。

学生Ｃ：私は来年から教壇に立ちます。すごく不安ですが、今回授業見学や分科会に参加させて頂いてすごく為になったし、勉強になった１日でした。

学生Ｄ：児童たちへの挨拶の中で（他の学校からクラスを借りて授業を行った先生）、その先生の姿勢や児童とのかかわり方を見て、とても胸に来るものがあり、感動してしまいました。児童達のために本当に一生懸命準備してこられたんだろうなと思ったし、本当に子どもが好きで、温かい心を持っておられるのが伝わってきました。

目の前で、血の通った実際の授業を見ることによって、本や講義では得ることのできない子どもたちの姿や、先生方の思いや１時間の授業に対する工夫や努力を感じることができた。やがて教壇に立つ学生にとっていい体験ができたのではないかと考えられる。

また、協議会に参加して、グループの中で発言を求められたり、全体の中で指名され発言したりする学生もおり、現場の先生方に混じって発言するという貴重な体験ができた。

●教育実践演習の課題

○「教育実習に行く前にこの講義を受けたかった。」「採用試験前に受けていればよかった。」という感想がたくさん聞かれる。時期的には無理だとは分かるが、学生の感想にもうなずけるものがある。

○レポートを３回提出させたが、期限を守らない学生が多い。教師を目指すものがそれで良いのか。学生の意識的な問題がある。

○公開授業に参加して、ほとんどの学生は、子どもたちの姿や先生方の熱意に感動してくるが、一部には、協議会で居眠りする教師や私語をする教師の姿を見て、幻滅する学生がいる。

○事例R：自分の教職観・教育観を再認識させる活動を中心に

●平成27年度の全15回の授業構成（履修カルテの活用を含む）

本年度の教職実践演習は15名が履修し、模擬授業やグループディスカッション等を中心に行った。まず、１回目～３回目において、教職履修カルテの振り返りを行った。具体的には、自分がどのような科目を履修してきたのかを確認することで、どのような知識・技能が身についたと思うかを自己評価させた。

次に、４回目～６回目において、教育実習の振り返りを含めた「教職課程での学び」の振り返りを行った。本学では、教育実習の振り返りは同一教科で行われるため、時に「そうだよね」といった感覚でお互いの感覚を共有するだけにとどまってしまう。そこで、異なる教科を希望する学生同士で振り返りをさせることで、自らの教科内容や教科教育法の特殊性を認識することができる。また、小学校に教育実習にいった学生もおり、異なる学校種での意見交換も行うことで、自らの教育実習を客観視させるようにした。また、自分の教育観がどのように変容したかを振り返るワークも行った。

７回目～12回目においては、模擬授業を行った。模擬授業では同じ教科もしくは学校種でグループを作り、代表者が授業を行った。基本的には、教育実習の査定授業のものを題材に、グループでその内容を修正させた。模擬授業後は、全員で授業の講評を行い、「自分だったら」という観点から改善策を述べるようにさせた。

13回目～14回目では、教育に関するDVDを視聴し、グループでその内容に関するディスカッションを行った。視聴したDVDは、菊池省三の「ほめ言葉のシャワー」に関するドキュメンタリー（NHKプロフェッショナル）と、映画「みんなの学校」の元になったドキュメンタリー番組である。

15回目は、全体の振り返りを行ったと同時に、教員免許を取得する意味について、再度各自がその意味を考える時間をとった。また、15回の授業期間中に、福岡市の小中学校において公開授業が行われたこともあり、必ず一つの学校の公開授業に参加し、その感想および考察をレポートで作成させた。

●過去３年間を振り返ったなかでの特色ある取組

これまで３年にわたり、教職実践演習を担当してきたが、その中で特に学生の省察を促すことができたと考えられる取組を紹介したい。

１．教育実習の振り返り

これまでの教職実践演習において、教育実習の振り返りの作業を行っている。その目的の一つは、他教科もしくは他学校種の教員免許を希望する学生同士がお

互いの実習経験を共有することで、新たに自らの実習経験の意義を再確認することにある。上述のように本学の「教育実習事前・事後指導」では、同一教科集団で行われるだけでなく、教科によってクラスサイズが50人を超えることもある。そのため、深い省察活動が十分には行われないという課題を抱えている。

具体的な活動としては、教科や学校種がバラバラになるようにグループを作り、まず個人で教育実習の振り返りをした。具体的には、「教育実習において最も苦労した点」について、ポストイット使って、書かせた。その後、グループごとに各自がその内容を発表しつつ、大きめの紙にポストイットを張る作業を行った。その際、発表しながらも「それだったら、こうしたらよかったんじゃない？」という議論も展開されており、その場で多様な観点からのフィードバックを得ることができていた。その後、KJ法を用いて、グルーピングをし、各グループの内容を発表させた。それを受けて、「では、そのような苦労を少しでも軽減するために、これから教育実習に行く学生に対してアドバイスを考えましょう」という問いを投げ、グループごとに教育実習に向けて準備すべきことややっておくべきことなどをまとめさせた。なお、このアドバイスは筆者が担当している教職課程科目を受講している学生に配布し、先輩からの意見という形で活用している。

２．自らの教育観・教職観の確認

もう一つは、自分の教育に対する見方や教職に対する見方を自覚するようなワークを実施している。平成27年度のワークでは、まず「教師は、○○べきだ」という文章を思いつくまま、挙げてもらった。15人全員で考えた内容を黒板に書き出し、同じ内容のものはグルーピングをした。その後、回答が多かったものを５つ取り上げ、その内容の優先順位を各自で付けてもらった。そして、優先順位について、グループで議論し、なぜその順位なのかを考えさせた。これらのワークは、「どれが正しいか」を導き出すことを目的にはしていない。むしろ、自分がどのような教職観に基づいているのかを認識することで、これからの教育実践のあり方を再度考えてもらうということを目的としている。自分では正しいと思っていた順番であっても、周りの学生とは大きく異なると、「なぜだろうか」と考えることになる。そうした省察の機会を与える上で、重要なワークであったと考える。

●教職実践演習の課題（開講形態、学生の反応を含む）

教職実践演習を担当する立場として、授業を進める上での次のような課題を今後検討する必要があると考える。

まず、教職実践演習自体が教職課程の「最後の関門」と位置づけられるものであるが、実際にはそのような機能を持たせるのは難しい。例えば、最終的に教職には就かないと決めた学生が多々いる中で、そうした学生に単位を出さない（毎回出席し、受講態度も良好）という選択はできない。一方で、教員になる学生とならない学生の温度差は大きいことは事実である。その差をどう考えるのかという点は重要な課題となる。

次に、履修カルテの活用についてである。共通のフォーマットであるものの、記載内容の濃淡は大きい。しっかりと書いている学生は振り返りが楽であるが、記載内容が不十部である場合、省察活動が深まらない。この点は、教職指導の一環として、履修カルテの記入をしっかりさせることが重要な方策となろう。

○事例S：

●平成27年度の全15回の授業構成（履修カルテの活用を含む）

本講義では、エンカウンター（構成的グループ・エンカウンター）を活用した児童・生徒の仲間づくりに関する模擬授業を行い、運営上のポイントや工夫点について実践的に学ぶことを目的とした。

第１回　オリエンテーション（自己紹介）
第２回　構成的グループ・エンカウンターについて
第３回　グループ体験実習１（相互理解）
第４回　エンカウンターを用いたクラス運営の実際（DVDの視聴）
第５回　グループ体験実習２（自己理解・他者理解）
第６回　ファシリテーションの視点と工夫
第７回　グループ分け、模擬授業の企画づくり1（アイデアの抽出）
第８回　模擬授業の企画づくり２（アイデアの具体化）
第９回　模擬授業の企画づくり３（アイデアの精緻化）
第10回　模擬授業の実施（第１グループ）および振り返り
第11回　模擬授業の実施（第２グループ）および振り返り
第12回　模擬授業の実施（第３グループ）および振り返り
第13回　模擬授業の実施（第４グループ）および振り返り
第14回　模擬授業の実施（第５グループ）および振り返り
第15回　全体のまとめ

●過去（１～）３年間を振り返ったなかでの特色ある取組（ロールプレイングのお題、発表テーマ等）の紹介

あるグループの模擬授業は、中学１年生の５月を想定して計画された。まだクラス内の交流が浅く、生徒がお互いのことを十分に理解し合えていない時期であるため、「言葉と体で楽しく表現し合い相互理解する」をテー

○プログラムの計画　対象：中学1年生5月

番号	時間	内容（エクササイズ名）	実施方法	留意点	準備するもの	担当者
	10:50～11:40				黒板にテーマ	
1	10:50～（5分）	導入	「今日はエンカウンター3回目です。少しお互いの事が分かってきたと思います。そこで今回は「伝える」という事を通して相互理解を深めていこうと思います。」	・ポイントをおさえ伝える。 ・分かりやすい言葉を使って		
2	10:55～（10分）	ウォーミングアップ テーマビンゴ	・様々なテーマ（出身地、兄弟、誕生日…）を書いた紙を用意し、テーマをビンゴのマスに入れる。 ・テーマに該当する人をさがし見つけたら紙にサインをしてもらう。 ・繰り返し3ラインのビンゴを完成させた人から教室の端に並ぶ。 ＊1人の人の質問できるテーマは1つ ＊同じ人につづけて質問しない ＊うそはつかない	残り何名かになったらゲームを終わし、1人だけ残るようなことをさける。	テーマの書かれた紙（A4） ボールペン又はシャープペン（各自で）	
		次のワークのグループ分け	縦に並んだ順に3～4人のグループをつくりグループで集まって座る。			
3	11:05～（15分）	スゴロクトーキング	・机の真ん中にスゴロクを置く。 ・サイコロを振る順番を決める。 ・サイコロの目の数だけ進み、止まったマスに書かれているテーマについて話す。 ・答えにくいテーマの場合は、話せる内容のマスまで引き返す。	各班をまわって	スゴロク サイコロ（各班に1つ）	

マにしたエンカウンターを企画した。この時期は集団体験にも緊張を伴うことが想定されるため、「楽しく協力してエンカウンターを行いながら『伝える』という体験」を生徒に提供できるような50分のプログラム構成となった（上図参照）。

導入（５分）
ウォーミングアップ（10分）：「テーマビンゴ」による相互交流
エクササイズ１（15分）：「スゴロクトーキング」
エクササイズ２（15分）：「ジェスチャーゲーム」
まとめ（５分）

●上記の内容において特に良かったと感じられたもの

ここで紹介したエンカウンターは、表現し合うことによる相互理解が目的となっている。しかし、中学１年生の時期は自分を他者に表現することへの「照れ」や緊張が生まれやすい時期でもあるため、生徒が表現しやすくするための工夫がエンカウンターの内容に盛り込まれる必要がある。その点において、このエンカウンターのプログラムでは、１）言葉以外での動きを伴った表現形式を重視し、２）生徒が楽しみながら自己表現できるようなエクササイズが採用されている。また、動きのある「ウォーミングアップ」から話し合い中心の「スゴロクトーキング」へ移行し、また最後に動きのある「ジェスチャーゲーム」へと展開するような構成にすることによって、「伝える」という体験を、静と動をうまく組み合わせた形で無理なく提供できるプログラムとなっている。

このように、エンカウンターでは単にエクササイズを行えば良いのではなく、生徒にしてもらいたい体験が実現しやすくなるように、いかにプログラム全体を構成するかがポイントとなる。ここで紹介した模擬授業は、その工夫がプログラムの随所に盛り込まれている好例である。

●教職実践演習の課題（開講形態、学生の反応を含む）

エンカウンターを盛り込んだ模擬授業の実践的学習は、学生にはおおむね好評である。授業アンケートでは「教師になった上で、学級運営にとても役に立つ」「自分が教師になってから使いたいと思ったエクササイズがいっぱいあった」等の感想があった。模擬授業の担当でない学生は生徒役となり、エンカウンター体験をするため、模擬授業を重ねるごとに学生の相互交流が促進され、授業の雰囲気も良くなっていく。ファシリテーターとしての実践的な学びを深めるだけでなく、エンカウンターを実施することで生徒にどのような変化がもたらされるのか、そのプロセスを体験的に理解することができるのも本授業の特徴である。

このように学びのプロセスを重視する体験型授業では、毎回の出席が基本である。しかしながら実際には、教育実習やスポーツ大会への参加、病気や自己都合などによって複数回にわたり欠席がみられる場合がある。欠席の多い学生は、他の学生との交流の機会も少ないため、受講生同士で築き上げてきた集団に対する所属意識が低いままで終わることもある。教職実践演習における受講生の学びの体験の質を高める上でも、出席率の向上は必須のものであると言えよう。

３．考察

先述したように、福岡大学の教職実践演習は、それぞれ担当する教員の専門性を活かした授業の展開を意図したため、19のパターンがある。事例AからSを概観して分かるように、その取組は実に様々だ。臨床心理学を専門とする教員は、不登校支援やいじめ問題への心理的対応、さらにはエンカウンターの手法といったように、臨床心理的アプローチを活用する取組を盛り込んでいる。学校現場の経験がある教員は、学校のリアルな姿を想定させながら、様々な活動をさせている。教育学の教員たちは、現代的課題に限らない普遍的な教育課題をどう捉えたらいいのか、という教育の見方を鍛える取組をしている。

多様な学生が存在し、多様な教員による多様な教職実践演習が行われていることが、福岡大学の教職実践演習の特色である。このことは、「教員として必要な知識技能を修得したことを確認する」という教職実践演習の目的からずれているかもしれない。しかし、そもそも学生にとって何が足りていないか、どういう点を改善したらよいかという「確認」は、教職実践演習の中で行われる履修カルテの振り返りや学生への教職指導によって明らかになる。そうした情報を基に足りない所を補ったり、長所を伸ばしたりといった活動を各教員が自らの専門性を踏まえて考えていくことが必要である。つまり、そうした「余地」を授業に残しておくことが、多様な学生がいる大規模大学にとっては重要な方策となる。上述してきた19のパターンは、まさにそうした「余地」から生まれるものであって、単に「バラバラにやっている」わけではない。

例えば、模擬授業を盛り込んでいる事例が数多く存在する。これは、文部科学省からも、授業方法・内容として盛り込むことが求められている項目である。しかし、事例から明らかなように、その内実は多岐にわたっている。題材（教科、道徳、HR等）、体制（個人、グループ）、方法（時間やルール）、省察（ビデオ撮影、グループディスカッション等）等々。これらは受講する学生の様子を踏まえ、教員の専門性を考慮した上で考えられたものである。

また、多くの事例の中で触れられていたが、学生が所属する学部･学科以外の学生と交流できるという点にも、総合大学の教職課程にとっては大きな意義がある。所属が異なるということは、基本的に取得しようとしている教員免許種が異なることを意味する。福岡大学の場合、多くの教職に関する科目が50名以上を超えるクラスであり、多様な学部・学科の学生が混ざっていても、なかなか交流する時間をとることが難しい。また、上述したように教育実習の振り返りは教科ごとに行われる。そのような中で、自らとは違った意見や観点をもっている学生と直接意見を交わすことのできる教職実践演習は、重要な場である。特に、他教科の授業づくりや、他学校種での生徒指導のあり方に触れることで、自らの視野を広げることができる。こうした意見の交換や学び合う環境を作るには、教職実践演習を担当する教員の力量にも大きく依存するゆえに、Faculty Developmentを通した職能開発や担当者間での情報共有を積極的に推進する必要がある。

最後に、教職実践演習の取組から見える教職課程全体の課題をまとめておきたい。一つは、「もっと早くにこうした授業を受けたかった」という学生の声をどう理解するかである。この声の背景には、「もっと実践的な学びを早くにやってほしかった」という思いがあることは容易に想像できる。教職実践演習に至るまでの科目において、どのような実践的な学びの機会を作り、それを教職課程全体の中でどのように位置づけていくのか、という点について検討していくことが必要であろう。特に、学校インターンシップの義務化が奨励されていく現状では、対応すべき課題の一つである。

もう一つは、学生の多様性ゆえに生じる教職に対する学生の「温度差」である。学生の出席率や課題提出状況に苦言を呈している事例も散見される。福岡大学の教職課程は１年次から始まるが、その時にはおよそ800人程度が履修登録を行う。その人数が４年間かけて半分以上に絞られ、４年後期の教職実践演習を受講する。こうしたスクリーニングが一定程度機能しているが、現実的には教員にならない学生も少なくない。教職実践演習での学生指導については、再度共通理解を深めておく必要があり、単位認定の基準を明確に学生にも伝える必要があろう。また、教職課程全体を通して、教員になる意志を確認したり､学生に自覚させたりするような教職指導も、教員の必要な資質能力を見極める意味で、重要な方策となる。

参考文献

Chen, J., Mak, R., & Fujita, S.（2015）“The effects of combination of video feedback and audience feedback on social anxiety: preliminary findings”, *Behavior modification*, 39(5), 721-739.

金美伶（2005）「韓国と日本の大学生における対人不安と同一性、公的自己意識、相互依存的自己との関係」『パーソナリティ研究』、14(1)、42-53。

眞野豊（2013）「公立学校における性的マイノリティの子どもに対する具体的支援―適応指導教室に通っていたAさんの事例を通して―」福岡県同教季刊誌『ウィンズ・風』76号、福岡県人権・同和教育研究協議会、55-75。

持留英世・有馬広海（1999）「教師効力に及ぼす教育実習効果」『福岡教育大学紀要』、48、303-309。

文部科学省（2006）「今後の教員養成・免許制度の在り方について（答申）別添１　教職実践演習（仮称）について」文部科学省。

西松秀樹（2005）「教師効力感と不安に関する研究」『滋賀大学教育学部紀要』、55、31-38。

大野木裕明・宮川充司（1996）「教育実習不安の構造と変化」『教育心理学研究』、44、454-462。

佐久間亜紀（2013）「教員養成改革の動向―『教職実践演習』の意義と課題―」日本教育方法学会編『教師の専門的力量と教育実践の課題』図書文化、111-124。

清水秀夫・大濱孝子・熊谷崇久・植木文貴・吉井健人（2011）「教育実習生がもつ本実習中の不安に関する考察」『群馬大学教育実践研究』、28、301-308。

宇佐見忠雄（2010）「新設・必修科目『教職実践演習』の探求」『実践女子大学文学部紀要』第52集、34-47。